

事業主体

主 催 鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

〔 青年海外協力隊鹿児島県OB会
（財）鹿児島県国際交流協会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 〕

後 援 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

鹿児島県・（社）青年海外協力協会・鹿児島県教育委員会

南日本新聞社・鹿児島新報社・西日本新聞社・日本経済新聞社

読売新聞社・毎日新聞社・朝日新聞社・NHK鹿児島放送局

南日本放送・鹿児島テレビ・鹿児島放送

協 賛 （財）古謝育英会・マレーシア航空

目 次

・ごあいさつ			
	鹿児島県国際交流課長	宿口 豊城	2
・体験報告書 発刊に当たり			
	実行委員会会長	弓場 秋信	3
・団員名簿／事業日程			4
・マレーシアの地図			6
・行動の記録			7
・団員手記			
断食を経験して		有川 善久	19
たくさんの人達との出会い		長岡 陽子	21
郷に入っては、郷に従え		島田 守	25
私とマレーシア		大川 志野	27
共に学ぶ		山之内卓也	29
協力隊員に接して		江並 美香	33
異国への第一歩		西本 強志	35
私の好きなスブランペラ		三浦 絹代	37
僕の挑戦		大淵 昇吾	40
17歳の決心		三島 貴恵	42
・あとがき		橋口 和典	46
・関連の新聞記事			47

〈イラスト…宮菌広幸 JOCV鹿児島県OB会

現在 クアラルンプール日本人学校勤務〉

ご あ い さ つ

鹿児島県国際交流課長
宿 口 豊 城

第2回鹿児島県青少年海外協力体験事業の成功おめでとうございます。

国際交流は、申し上げるまでもなく、各人がお互いに相手方の生活、風俗、習慣などを理解しあうことが大事なことだと思います。

この体験事業は、鹿児島県の青少年がホームステイにより、相手国の地域のみなさんと生活を共にしながら、派遣先の地域住民の生活の安定と地域発展のために献身的な活動をされている「青年海外協力隊」の皆さんの活動に参加し、若い澄んだ目で国際交流・国際協力の現場を見つめてもらう、すばらしい企画であると思います。

県におきましても、国際交流の一層の推進を図るため、青年海外協力隊の支援及び研修生等の受け入れを行う「海外技術協力等推進事業」・「アジア・太平洋農村研修村」の整備・「鹿児島・香港交流会議」・「世界へはばたけ鹿児島の青年事業」・「国際交流女性のつどい」など多岐にわたる事業を実施することとしています。中でも「アジア・太平洋農村研修村」の整備は、県・鹿屋市・からいも交流財団等が協力して、進めるもので、地方自治体とNGO（民間援助団体）がそれぞれの特性を生かしながら、農業技術の研修等を通じてアジア・太平洋地域の幅広い交流、協力を推し進めるという我が国でも初めての試みです。

こうした中、今回のこのマレーシアでの青少年海外協力体験事業に参加された皆さんは、開発途上国とはどういうものなのか、また自分が住んでいるこの日本がどういう位置にあるのか、全く新しい観点から見つめ直すとともに自分なりの国際交流のあり方を体得され、今後これを生かしていただけるものと思います。

最後に、この事業を実施されました、青年海外協力隊鹿児島県OB会・鹿児島県青年海外協力隊を支援する会・財団法人 鹿児島県国際交流協会のみなさんに敬意を表すると共に、この事業が今後一層充実したものとなることを希望したいと思います。

体験報告書発刊にあたり

鹿児島県青少年海外協力体験事業
実行委員会会長 弓場 秋信
(JOCV鹿児島県OB会会長)

昨年、青年海外協力隊発足25周年事業の一つとして全国で始めて行ったマレーシアでの鹿児島県青少年海外協力体験事業は、県内外より大きな注目を集める中、成功裏に終わりました。

事業終了後参加した中・高校生10名の体験談を綴った感想文「Jumpa Lagi i! Kg. Salimandut!」や、団員がそれぞれの学校や地域で行った体験報告会での反響は大きく「次の募集はいつですか」との問合せや、この事業に使って下さいとの寄付の申し出等、県民の関心が高い中、第2回目の実施へと進んで行きました。

新聞等での募集に県下の中・高・専門学生102名の応募があり、作文・面接の一次試験、面接のみの二次試験で、自分の将来の夢を語り、外国人との心の触れ合いを望む10名が選ばれました。

7泊8日のマレーシア滞在中、団員達にはさまざまな出来事が待っていました。食事の作法や味付けの違い、マレーシアの国教イスラム教の教えからくる日常生活の戸惑い、特にホームステイ中の断食（プアサ）の体験、暑いさ中での労働、トイレやマンディ（水浴）等々。

気候・風土・宗教の違う中で団員は大きなショックを受けながらも、それに果敢に挑戦し、マレーシアの人々の気持を理解する事に努め、自分達と違う価値感が存在する事を体で覚えました。又、同時に日本も地球の中での一員である事が理解出来たようです。

一方、発展途上国で技術や技能を生かして、国づくり人づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動を、5人の派遣中隊員より学ぶ事が出来ました。村人と共に住み、同じ言葉を話し、同じ食事をしながら、マレーシアの人々の「豊かな生活」実現の為には、今何が必要かを考え、働いている協力隊員は、団員に現状を熱っぽく語り、その姿はまぶしく輝いていました。団員の多くが自分自身の将来の姿をそこに見たようです。

熱帯気候での生活・異文化ショック、そして多くの人々との出会いを、団員10名が自分自身の言葉で表現したこの体験報告書が同世代の多くの人達に読まれる事を切望致します。そして今後共鹿児島の子供達を1人でも多く、海外に派遣し異文化体験が出来ますよう努めたいと思います。

最後にこの事業に御協力いただきました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

団 員 名 簿

(学年は平成4年4月現在)

氏 名	学 校 名	学 年	住 所	出 身 地
大 淵 昇 吾	山野中	3	大口市	
有 川 善 久	桜丘中	3	鹿児島市	
長 岡 陽 子	志学館中等部	3	鹿児島市	
大 川 志 野	南指宿中	3	指宿市	
山之内 卓也	甲南高	2	鹿児島市	
島 田 守	鹿屋農高	3	鹿屋市	鹿児島市
西 本 強 志	鹿児島工業高専	5	隼人町	串良町
江 並 美 香	鹿屋高	3	鹿屋市	
三 島 貴 恵	鹿児島中央高	3	鹿児島市	
三 浦 絹 代	鹿児島玉龍高	3	鹿児島市	

随 行 者

弓 場 秋 信	実行委員会会長・JOCV鹿児島県OB会会長
橋 口 和 典	JOCV鹿児島県OB会事務局長〔坂元醸造(株)研究所〕
村 上 康 弘	JOCV鹿児島県OB会幹事〔ヤマハ鹿児島セミコンダクタ(株)総務課〕
馬 場 真 理	JOCV鹿児島県OB会会計〔市立星峯中学校〕
是 枝 洋 志	鹿児島県国際交流課
前 田 昭 人	南日本新聞社
崎 山 雄 二	鹿児島テレビ

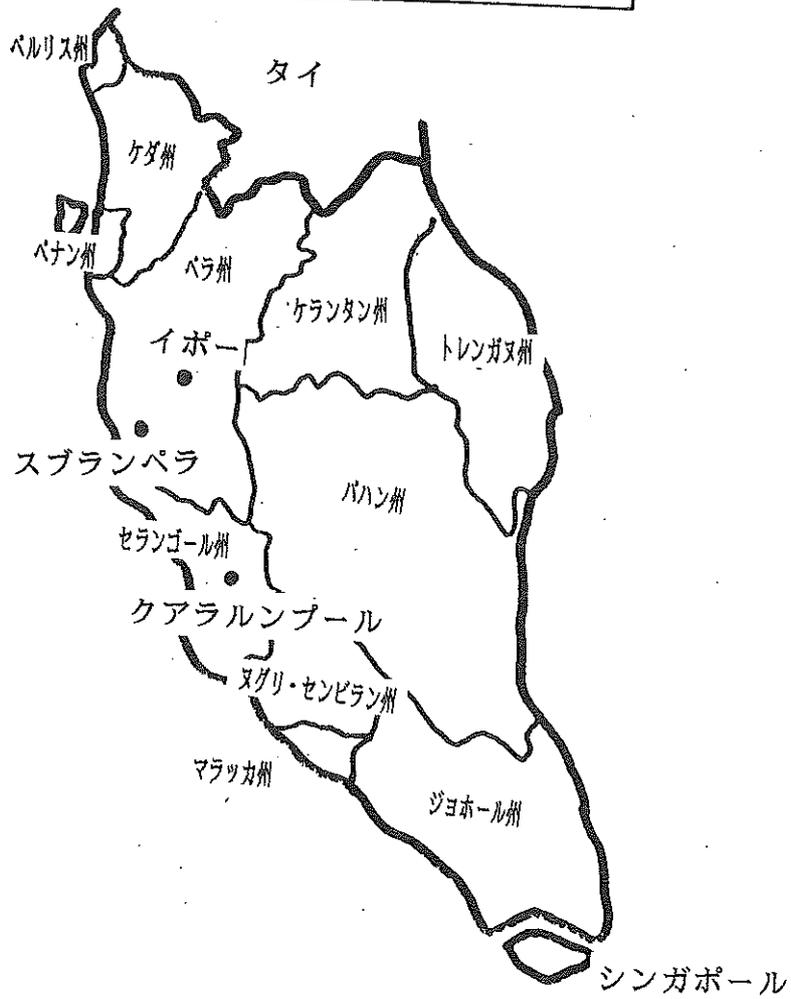
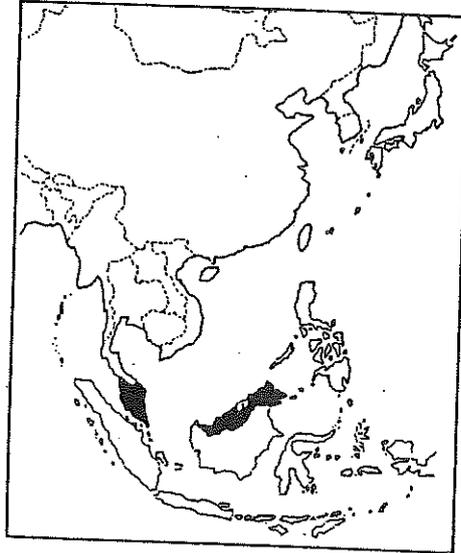
* JOCV = Japan Overseas Cooperation Volunteers (青年海外協力隊)

事 業 日 程

1日目	3/27(金)	AM PM	結団式 鹿児島→福岡→マレーシア (クアラルンプール)	ホテル泊
2日目	3/28(土)	AM PM	JICA事務所訪問 クアラルンプール市内視察	ホテル泊
3日目	3/29(日)	AM PM	クアラルンプール→ →スランペラ ホストファミリーとの対面式	ホームステイ
4日目	3/30(月)	AM PM	FELCRA職員によるスランペラの概要説明 スランペラでの奉仕プロジェクト(プール建設) ”	ホームステイ
5日目	3/31(火)	AM PM	スランペラの種もみ工場・ほ場・オイルパーム農園見学 青年海外協力隊員による現地活動説明 奉仕プロジェクト(プール建設) さよならパーティ	ホームステイ
6日目	4/1(水)	AM PM	スランペラ→イポー スター校訪問(日本語教師隊員によるスター校の説明・ 日本語を受講している学生との交流会) イポー→クアラルンプール	ホテル泊
7日目	4/2(木)	AM PM	クアラルンプール市内視察 さよならパーティ	ホテル泊
8日目	4/3(金)	AM PM	クアラルンプール→ →福岡→鹿児島	

F E L C R A : マレーシア連邦土地統合整備公団

マレーシア



3月27日 (金)

1日目

鹿児島→福岡→クアラルンプール

西本 強志

鹿児島の天気は雨にも拘らず、私の気持ちは、晴々としていた。生まれて初めての海外。1分でも1秒でも早く行きたいと、気分はもうマレーシアに飛んでいた。

国際交流プラザで結団式が行われた。報道関係者も多数出席していた。

団員として行けるのは、私を含めてたったの10人、あらためて「これは、スゴイことだ!」と実感した。

10人それぞれ、1人ずつマレーシアで体験したい事、勉強したい事などを発表した。みんな立派な事を言っていた。私も

「落ちついて、その様な事を言わないと。」と考えていたが、ついTVカメラを意識してしまい、何を話したのか自分でもよくわからなかった。日本を離れるのも初めてだけど、TVに映るのも初めてだった。心臓がドキドキとビートを刻んでいた。

いよいよ結団式も終わり、リムジンバスで空港へと向かった。バスの中では団員のメンバーと、「マレーシアって、やっぱり暑いだろうな。」「本当に断食であるの。」「食べ物おいしいかな。」と言葉を交わし、マレーシアの話で持ち切りだった。

鹿児島空港で、母が私に「せっかく行けるんだから、何か得て帰ってきなさいよ。」と言った。そのとおりだと思った。せっかく手にしたチャンス、マレーシアでの生活、

人々を通して日本では体験できない事を体験できたらと思った。

私の場合、今年は今後の進路を決定せねばならず、その意味でもこの体験を有意義に過ごして、これからの人生に何かプラスになればと考えていた。

鹿児島を離れ福岡空港へ、福岡は雨は降ちていなかった。いよいよ福岡空港からマレーシアへ向けて出発だ! マレーシアは1年中“夏”らしいと何かの本に書いていた。

さあ、いよいよ離陸する。不安と期待で胸がいっぱいだった。「日本、短い間だけどさようなら! 日本に帰ってくる時は、全ての面で一回り大きくなって帰ってきたい!」MH83便は17:15私達を乗せ、クアラルンプールに向けて、福岡を離れた。



3月28日(土)

2日目

JICA事務所→クアラルンプール市内視察

山之内 卓也

7:00に起床し、ホテルで朝食をとり、午前中はJICAの事務所を訪問した。草野次長より話しをうかがい、また私達も質問した。協力隊の活動状況の他に、人種間、宗教などの質疑応答で、とても充実した時間を過ごせた。

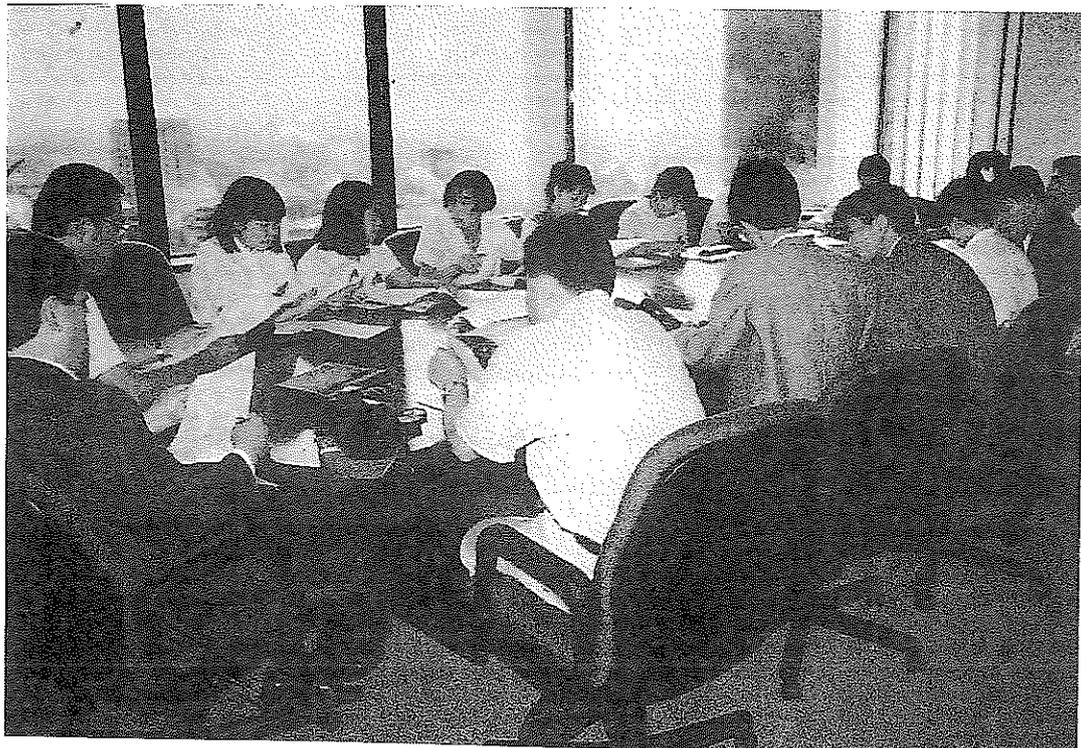
草野次長の話しによると今年のマレーシア国内は、異常気象にみまわれており、気温も平常より高く、夜に雨が降ったり、山火事が頻発しているそうである。やはりここマレーシアでも環境破壊等による温暖化が進行しているという事に恐怖を覚え森林伐採、木材の大量輸入などで、その原因の一つにもなっている国の人間の一人として、改めて、自分の国の事ばかり考えているだけではいけない事を痛感した。

その他、経済力はASEANの中では先

進国という事なども教わった。昼食はマレーシア料理店でとりその後、クアラルンプール市内のすず(PEWTER)の加工工場や、バティックの織物工場などへ行き、ろうけつ染めなどを見学した。ここでは、たくさんの労働者によって、ゆっくりとしたペースで殆ど手作業といった感じで作業が進んでいた。やはり、細かい作業なので、機械化や大量生産化が難しいのだろうか。しかし、大量生産したところで、伝統的なバティックやピューターの美しさは、保たれないような気がして、今のままでやっていく方法が一番ではないかと思った。

その後、ヒンドゥー教の寺院のあるバツ洞窟を見学し、ココナッツジュースを生まれて初めて飲んだ。夕食も、マレーシア料理をおいしくいただいた。

夕方、乾期にも拘らずスコールがあった。明日はいよいよスランペラへ向けて出発だ。



3月29日（日）

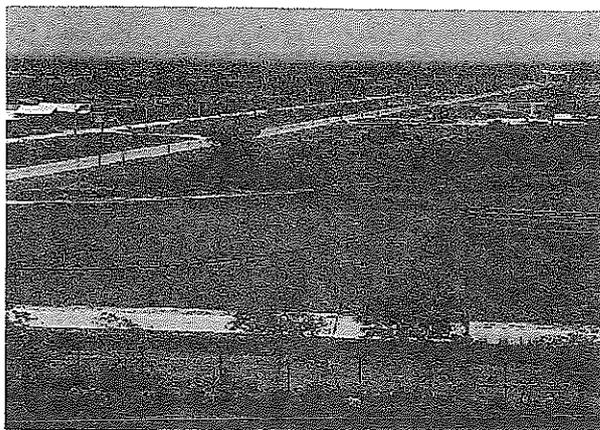
3日目

クアラルンプール→スランペラ

江並 美香

朝からスランペラへの移動だった。とても疲れた。途中、バナナ、ココナッツなどの様々なプランテーションを見て“マレーシアへきた”という感じを受けた。バスの窓越しに見る風景も日本の細々とした物とは異なり、とても広々としていた。途中イスラム教のモスク（寺院）を数箇所見かけたがデザイン、色づかいが異なっているものもあり、きれいだった。そしてこれによりマレーシアにおける宗教・イスラム教の影響の大きさを感じさせられた。

スランペラに行く途中、高床式の家を多く見かけた。暑い熱帯の気候を少しでも快適に過ごすため、また雨による水害を防ぐための工夫ではないかと思う。スランペラはとてもきれいだった。またFelcra（連邦土地統合整備公団）により、土地の区画整理もきちんと行われていた。



私のホームステイ先は高床式の家ではなかった。天井には大きな扇風機みたいなものが付いていて、日本の家ではあまり見かけない光景だった。また、換気通風を良くして暑さを和らげるための窓も日本のような引き違い窓ではなく、ブラインド形式みたいな感じに工夫されていた。

イスラム教徒は、現在プアサ（断食）中だが私達にはジュースなどを振る舞ってくださった。ジュースは水にジュースの原液と砂糖を溶かすものだったが、ホストマザーが私に渡すときに“味を見れないから甘くなかったり甘すぎたらごめんなさい”と一言そえてくださった。こんなやさしい心遣いが今でも印象に残っている。マレーシアの人々は多民族・多宗教の中で暮らしているためお互いを尊重することをとても重要視しているような気がする。そしてこの点は私達も学んでいく必要があるのではないかと思う。また、勉強にも熱心だった。

鹿児島県出身のマレーシアでの協力隊員の北田さんが私達と一緒にステイされていたが、私は彼女を捕まえては“これはマレー語では何と言うのですか？”などと質問をしてはノートにメモをしていた。

3月29日（日）

3日目

マンディ

有川 善久

9:30にホテルを出発してから、バスで約6時間もかかって、ホームステイ先のペラ州スブランペラに着いた。

バスの中では、マレー語の勉強や、マレーシアの歌の練習をした。また、途中オープンマーケットで水浴びをする時に使うサロンと呼ばれる大きな腰巻を買った。

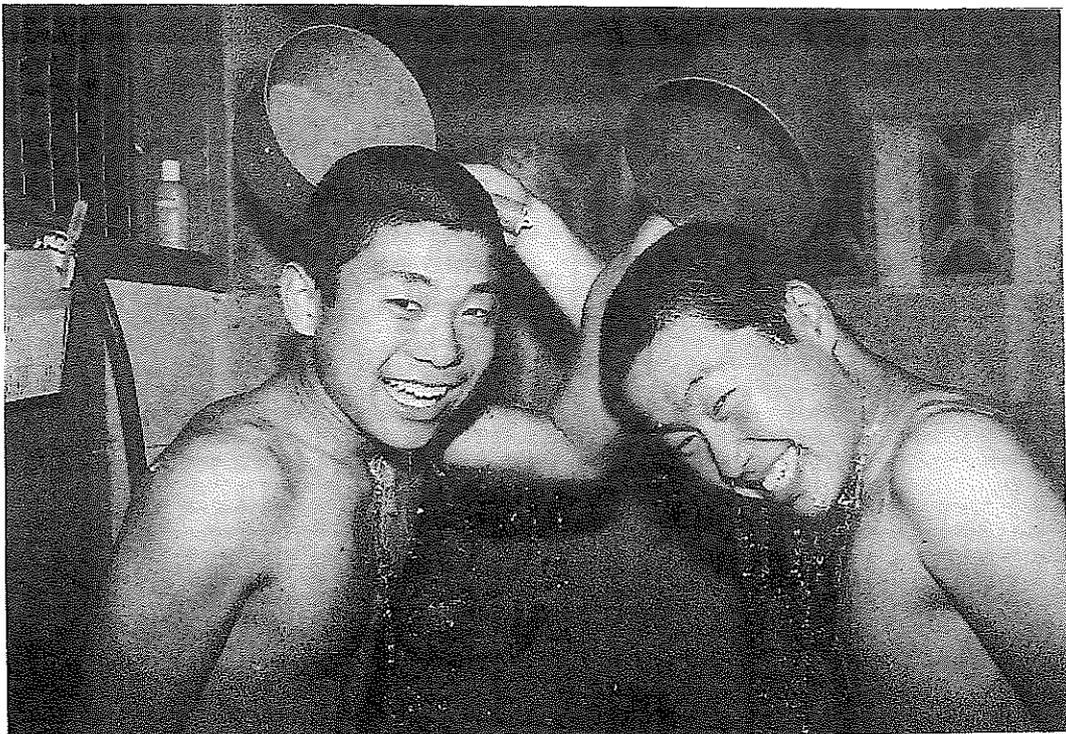
スブランペラに着いたのは、15:30、それから受け入れてくださるホームステイ先の家族と対面した。ホームステイ先の家に行ってから、ずっと緊張しっぱなしで何をしゃべればいいのか分からなかった。

家は質素だったがたいへんな歓迎で、あ

たたかさを感じた。一緒にホームステイする団員の大淵君が慣れないマレー語で自己紹介をしたり、日本からのお土産を渡したりしたので、会話の糸口ができ話しが進んだ。

少しなごんだころ、マンディ（マレー語で、水浴びのことである）をなさいと言われたので、買ったばかりのサロンを身につけ、マンディをした。最初は、水を冷たく感じたが、2・3度かぶる内に、やみつきになって大淵君とお互いにかけてたりした。ひんやりとした水が、熱くなった体を冷ましてくれて、真夏の解放感を味わったような気分だった。

結局今日は、2・3度マンディをして夕食の後、かやの中の床についた。



3月30日(月)

4日目

断食

島田 守

今朝は5:00に起床。起きてすぐに朝食をみんなで食べた。なぜ5:00に起きて食べたかという私たちのホームステイ先では、断食(プアサ)が行われていたため、その断食は朝の5:30から始めて夜の19:30までは水を一滴も飲んでほだめ、食べ物も一切口にしておはだめというとてもつらいものだった。そのため、夜の19:30から朝5:30までの間に飲んだり食べたりしなければならず、この時間帯に朝食を食べることになったのである。

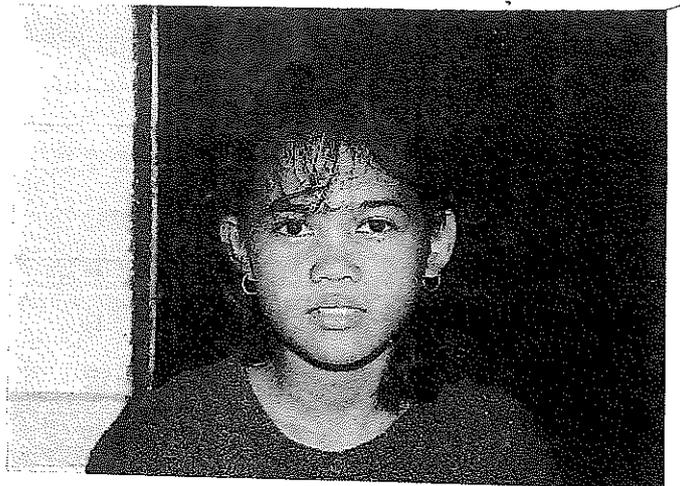
私と山之内君は昨日からホームステイをしているわけだが、「When in Malaysia do as the Malaysians do.」「君がマレーシアにあるときは、マレーシア式に生活せよ」ということでトイレでは左手でお尻を洗ったり、食事の時は右手だけで食べるようにしてきたので、このプアサだけはホームステイ3日間のうち、ぜひとも1日は挑戦してみたかったのである。

宗教が違うのでやっても意味はないんじゃないかと思ったがやはり、彼らがどういう気持ちでどういう意味でこのプアサに挑戦しているのか私も体験してみたかったため、このプアサに今日は山之内君と二人でトライしてみることにした。

昼間は青年海外協力隊で保母として活躍している新家さんの活動している保育園で

プール建設を行った。

プアサ中の私達にとってはこれが一番こたえた。日中気温37℃の中セメントを練ったり、レンガを積み重ねたり、汗だくになりながら、体は水分を要求しているのにプアサのために飲むことができない。これは本当につらいものだった。14時間たった19:30、なんとかプアサは達成できたが、私達が日ごろ物に対して感謝しているようで実際は感謝しておらず、感謝がたりなかったことがよく分かったし、私達は何不自由なく暮らしているが、他の国(世界)の人の中には1日1食も満足に食べられない人がいると思うと、その人たちの苦しみも分かり、私達がこれからこういった人々にどういう風に行動又は支援していかねばならないか、考えさせてくれる機会を与えてくれたような気がした。



3月30日（月）

4日目

プール建設

長岡 陽子

スブランペラでの初めての朝、家ではお母さんに借りた民族衣装のパティックサロン（大きな布を腰にまく）が、何と云っても風通しが良く涼しくてすっかり気に入ってしまった。

昨日、「断食に挑戦したい。」という意志を告げたところ、こちらの家族も納得してくれたのはいいが、朝4：30に朝ごはんのため起こされたのにはまいった。

そして困ったことに、朝起きると早速おなかの信号が鳴りトイレに行きたくなった。人間の生理現象は止める訳にはいかない。辺りはまだうす暗く、遠くからコーランの不思議なひびきが聞こえてくる。私達の家のトイレは家から少し離れたところにある。また、トイレではちり紙を使わぬ習慣がある。電気のつかない真っ暗のトタンの囲いのトイレに入るとアンモニアのにおいがつんとくる。

人々は、そこで用を済ませた後、横にくんである水を桶でくみ、左手で始末しおしりがひんやりとする。最後に水でおしりと左手を洗う。始めは本当にショックで、トイレで泣きたくなったが、やってみると案外こちらの方が自然な気がしてくるから不思議だ。

たったこれ1つのことなのに、日本とはこんなにも習慣が違うのかと身にしみて感

じた。

今日は2つの大きな挑戦が待っている。断食を朝5：30から夜7：30まで、約14時間水一滴も飲まずに続けながら奉仕プロジェクトとして、保育園の子供達のためにプール造りをするのだ。

どちらも全く初めての体験だ。じりじりと太陽が照りつけ暑さを増した。マレイシアの日中は気温が37℃近くまで上がる。ほぼ体温と同じだ。

炎天下、まずはセメント練りからはじまった。砂や土を決められた分量運んでは捏ね、運んでは捏ね、皆が交代で仕事を分担する。ピークは12時から2時ごろ、とにかく暑い。

汗が流れだし、顔をゆでだこのようにさせながら、作業は続いた。

結局、レンガ積みまで終わらせるには18：00近くまでかかった。途中、断食に挑戦した10名のうち4名がやむなく脱水症状で脱落してしまった。結局、6人が最後まで残り、今日の工事は完了した。

途中かなりつらくなったりもしたが、何とか今日の目標は達成できた。皆、帰り際とてもぐったりしていたが、それでも目は「やったぞ。」という喜びと充実感でいっぱい、顔も上気していた。

しかし、帰り道はさすがに足どりが重たかった。帰ってすぐにマンディをしたが何よりも最高に気持ちがよくて、いくらか疲れがとれたみたいだった。疲れた時は日本

の熱いお風呂も良いが、マンディもてっとり早くてなかなか良いと思った。19:30頃から夕食を囲んでの家族団らんが始まった。お母さんは英語が分かるので、いろ

んな話しに花が咲いた。

家にはどこからともなく近所の子供や大人達が集まってきてにぎわっていた。まるでみんな親戚の様な感じだった。



3月31日 (火)

5日目

スランペラでのさよならパーティー

三浦 絹代

Felcra (連邦土地統合整備公団) で現地の協力隊員の柏木さんの活動内容を聞き、種もみ工場、カカオとココナッツミルクの農園、そしてオイルパームのプランテーションを見学した。

午後から保育園に行き、きのうのプール造りの続きを着々とした。すごく暑い日差しの中、みんなが一丸となって造るその姿は本当に絵になっていた。汗で肌をベトベトさせながら一生懸命に働き完成した時のこと、いや、それ以上にこのプールで遊ぶ子供たちのことのみを考えて造った。完成したときは、私でも役に立ったのだという充実感でいっぱい胸があつかった。また、完成したときのみんなの笑顔は一生思い出に残るだろう。

夜、さよならパーティを開いた。島田、山之内君のfamilyの家ですることになった。歌を始め、柔道、書道、おり紙、尺八と日本の文化をみんなで披露した。また、私達を受け入れてくださった家族もペラ州の伝統的な踊りを披露してくれた。このようにお互いの文化を交流することによって私は少しでもマレーシアの人々に近づけたような気がしてうれしかった。そしてマレーシアの人々も私たち日本人を理解してくれたら真の交流ができるだろうと思った。最後に、私たちはみんなで“今日の日はさよう

なら”を歌ってフィナーレとした。この3日間のホームステイのこと、このプログラムの選考試験のこと、マレーシアに来るまでの苦勞、今までの事を考えていたら涙があふれ出てきて止まらなかった。

そしてスランペラ。この村は開発しつつあるが、日本の生活と比べるとまだまだ不自由だ。しかし、彼らの心は日本人以上に明るく、広く、たくましかった。私はそんな彼らに魅惑されたのか本当に帰りたくないと思っていた。ずっとスランペラに残りたいと心から願った。



4月1日(水)

6日目

スブランペラ→イポー→クアラルンプール

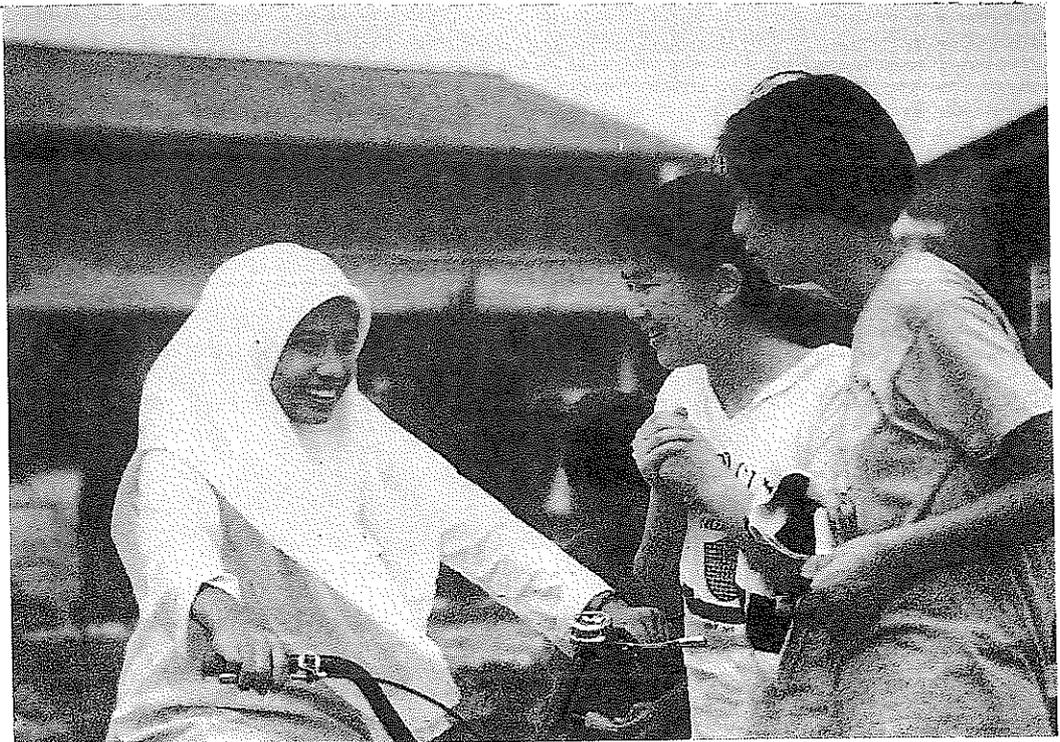
三島 貴恵

朝、お母さんに「マカン」と言われる前にコーランで目が覚めた。明日の朝はコーランに起こされることがないかと思うと急に悲しくなった。ジャップフリーとジャンサリにお別れをした。朝食は、私達が大好きだと言った「目玉焼」だった。きっと今日の為に作ってくれたのだろうと推測するとまた悲しくなった。

7:30 Felcraへ向かう。今日はお母さんと話しながら歩いた。タスカまでは笑っていたが、タスカで保母さん全員と子供達が手をふっている姿を見たら涙があふれ出た。保母さん1人1人と握手して「また来てね。」と言われるともうどうしようもない位悲しくなった。ありがとう。また帰ってくる。

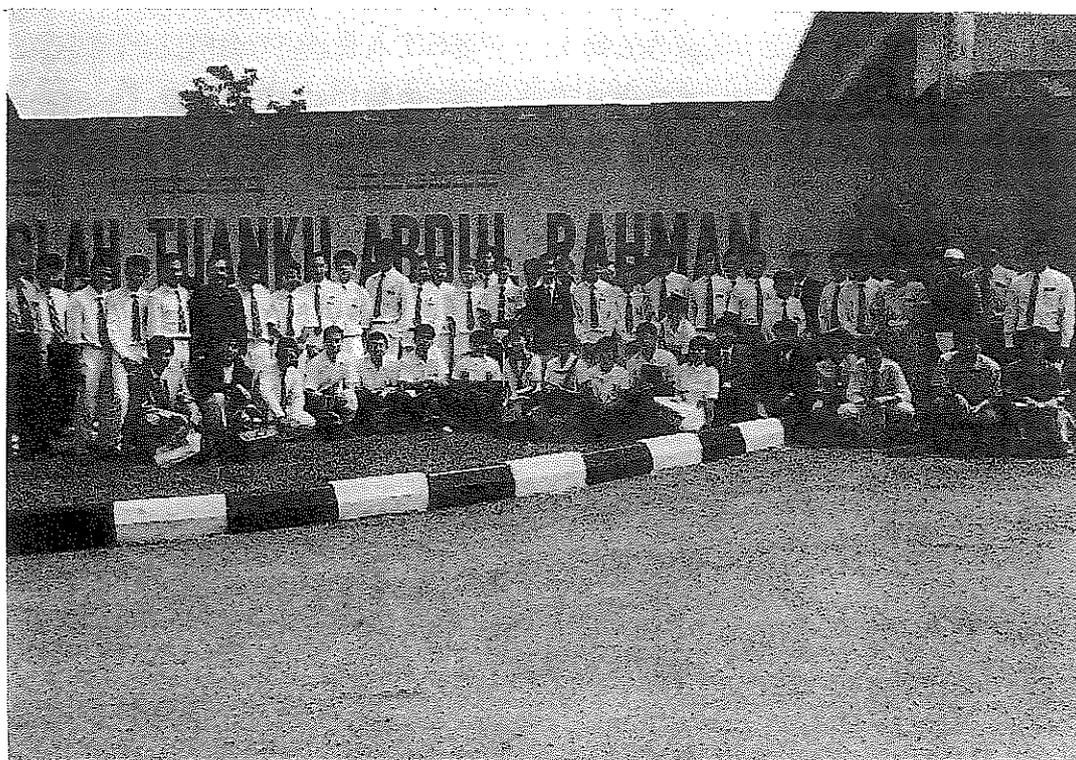
Felcraへ行く道のりはいつもより遠かったような気がした。途中、大川さん、長岡さんと合流し4人で泣きながら歩いた。Felcraの食堂で朝食をとった後、お別れ会だった。私はずっと泣きっぱなしだった。お父さんから置き物もらった。お母さんからバスの中で食べなさいとおかしもらった。本当にありがとう。一生忘れません。バスに乗り込むと涙で目の前は何も見えなかった。誰かが「泣いていたら、この風景を覚えて帰れないよ。」と言って私の背中をたたいてくれた。その時、ちゃんと見ておこなくてはと思い、なに1つ見落とすことがないように、きっちり目を見開いていた。ありがとうスブランペラ。

そしてイポーへと向かった。イポーにあるSTARという名門校を訪問した。日本語を勉強している4年生(16歳)達と図書館で会話をした。小学校卒業のときに全



国統一テストがあって、そのときの成績優秀者を集めているそうだ。日本も学歴社会だがそれ以上にマレーシアはすごいらしい。驚いた。このようなエリートを集めた学校は全国に36校あるそうだが、その中でもこのSTARは優秀らしい。私達10人が一人ずつ4~5人のグループに入って質問され、それをSTARの学生が「私の友達は・・・」と紹介する形式で会話をした。私の班の子は、出身は皆バラバラでサラワクからきたという生徒や、クアラルンプール、マラッカ、コタ・バルなど様々だった。昼食は、イポー市内の中華料理店でとった。そしてバスでクアラルンプール市内へ

戻った。途中すずの露天堀りを見た。大きな穴に水がたまっていた。丘を見ると中国人のお墓がたくさんあった。それらのお墓は皆同じ方向を向いて建っていた。何かの本で読んだことがあるが、中国人は昔、海を渡ってこのマレーシアにやって来たので、皆お墓は海の方を向いているという文を思い出した。それにしてもイポーの町は、中華系が多いなあというのがイポーの町での印象であった。19:00ごろクアラルンプールへ到着。夜、知人が私を訪ねてホテルまで来てくださった。明日はクアラルンプール市内の観光だが気を抜かずに頑張りたい。



4月2日(木)

7日目

クアラルンプール視察

大淵 昇吾

昨夜は十分な睡眠をとって、9:30にホテルを出発した。最初に行ったのはゴムの木園だった。ゴムの木に傷をつけると白い樹液が出てきた。天然ゴムの採取は以外



と簡単だと思った。次に独立記念碑を見学した。ここにはマレーシア独立の為に戦った兵士達のモニュメントがあった。それから、国立回教寺院とオールドモスクへ向かった。国立回教寺院では、女性は肌を見せてはいけないということで、ガウンとショールを着用して入った。イスラム教の人達はこんなに暑い中、あんな格好をしなければならぬなんて大変だと思った。オールドモスクは、町の中心地にあるのに、なんだかとても落ち着く場所だった。

午後はセンラルマーケットでショッピングをした。めずらしものがたくさんあり、選ぶのに時間がかかって、全てを見ることはできなかった。ホテルへ帰り、21世紀友情計画で、日本にきたことのある人達とのさよならパーティにのぞんだ。浴衣に身を包んだ私達は、日本舞踊や剣道、歌などを披露した。最後の夜にふさわしい、いいパーティだった。考えてみると、もうマレーシアにきて1週間たってしまった。本当に短かったような気がする。いよいよ明日、日本へ帰らないといけなと思うとなんとか悲しく思った。

4月3日（金）

8日目

クアラルンプール→福岡→鹿児島

大川 志野

今、飛行機の中で書いています。あっという間の一週間でした。でも思い出は一ヶ月分くらいあります。いや、それ以上かもしれないかもしれません。マレーシアに来て本当に良かったと思います。他の人みたいにはうまく言えないけど“人生”というものを深く考えさせられました。

たった一度しかない人生をどう生きるべきか・・・

今の私にはまだ何もできないけれど目標に向かって少しずつでも近づいていけたらいいなあと思います。

こんな私にでもできることはきっとあるはずだから・・・

この体験を通して日本、そして自分自身をみつめ直すことが出来ました。これを機会に今までの私の欠点を改善して、新しい私になれるといいなあと思います。そして、何年後かには協力隊員になれると信じています。

今の私はとっても小さいけれどこれからいろんなことを考え、勉強して悩んで大きくなりたいです。

いつでもやさしくしてくれて、兄弟みたいに仲良しだった他の団員9人、すばらしい思い出をありがとう。

そして、こんな私にたくさんのことを教えて下さった弓場団長をはじめ引率の方々、本当にお世話になりました。

これから私は、いろんなことにトライしてみようと思っています。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。



断食を経験して

有川 善久

(桜丘中学校 3年)

朝早く、僕はたたき起こされた。時計の針は、まだ5:00を指している。眠い目をこすりこすり、食卓についた。味は分からなかったが、とにかく腹の中につめ込んだ。今日の断食にそなえて……。

世界三大宗教の一つ、イスラム教、そのマホメットの世界がそこにはあった。日本から約5000km、飛行機で約6時間のところに、文化も、風習も、宗教もすべてがちがう、マレーシアがある。マレーシアの人々は、ほとんどがイスラム教徒で、ホテルにも、メッカの方向をしるした矢印があった。女性は、肌を出すことを禁止され、異性と握手もしてはいけない。それに加えて、一ヶ月間もの断食がある。僕達が行った一週間は、ちょうどその断食の期間だった。

断食というのは、太陽が昇っている間、食べ物も食べてはいけないし、水も飲んではいけない。そのため、朝、太陽が昇る前に朝食をすませるのだ。そして、太陽が沈むまでの約14時間、19:30まで、飲まず食わずの、過酷なレースがくりひろげられる。現地の人々は、昼間は、何も仕事もせず、ただ時を過ごしているのだが、団員10名は、断食をしながら、「プール造り」に挑戦した。

保育園の庭に掘った、半径2m、高さ60cmくらいの、大きな穴に、レンガを積んで幼児用のプールを造る。セメントを混ぜたり、レンガを運んだり、仕事はとにかくきつかった。午前中は、まだ余裕があり、セメントを混ぜながらも、笑ったり、話をしたり、冗談を交わしたりしていた。しかし、足元の影も短くなり、にくき太陽が頭の上に照り輝く午後になると、団員達の顔から笑顔が消えた。だんだんと蒸し暑くなり、噴き出る汗と、湿気とで、じとっとしてくる。スコップを持つ手もしびれてくる。腰はジンジンと痛くなり、足元は立っているだけでもフラフラしてきた。口を堅く真一文字に結び、団員達は、黙々と作業を続けた。

三時間ほどたったころ、作業も一段落し、休息もとった。保育園の中に入って、一時間ほど疲れをいやす。もちろん昼食もあるわけでなく、僕達は、いつの間にか大きく「大」の字を書いて、深い眠りに落ちていた。

休息も終り、午後の作業が始まった。もう、団員は、「あと少しでプール造りも終る」ことしか頭になかった。午後は、主にレンガを積んで、仕上げの段階だ。団員達

は、体力もとりもどしたのか、せつせと作業にとりかかり、やっとプールも完成した。うれしさと満足感でいっぱいになり、プールの隅に名前を彫って帰ってきた。

プール造りも終わり、一緒にホームステイした大淵君と、ホームステイ先へ帰って行った。たどたどしい歩調で、一步一步ふみしめながら。遠くを見れば、ぼんやりと霞んだアスファルトから、ゆげが昇って、ユラユラゆれていた。家に帰りついても、断食終了まで、まだあと二時間もあった。することもなく、二人は水浴びをした。ただひたすら水をかぶるだけだが、それだけで、何となく表情が緩んできた。二人でかけ合いながら、「夕食まであと少しだね、あと少しだね。」と、確認し合うかのように、元気付けた。

水浴びも終わって、夕涼みをしていると、

急にラジオの音がにぎやかになったような気がした。すると、ホームステイ先のお父さんが、レースが終わったことを教えてくれた。僕達は、感激などよりも、水が欲しくなって、コップに注がれたジュースを一気に飲みほした。おかわりしたジュースの水面に、今日の出来事が次々に映った。朝早く起きたこと、プール造りをしたこと、疲れた足でやっと帰ってきたこと、ひたすら水浴びをしたこと、様々な事を、僕は一気に飲みほした。

苦しかったけど、断食をやり終えた満足感もあり、また自信がついた。大人になった時、もう一度あのプールを見に行きたいし、また機会があれば、断食に挑戦してみたい。この経験をステップにして、世界のもっと色々なことに目を向けていきたい。僕自信も、もっと深く勉強したいと思った。



たくさんの人達との出会い

長岡 陽子

(志学館中等部3年)

今回、私が青少年海外協力体験事業に応募してみようと思った直接の動機は、三年間マレーシアの日本人学校へ赴任していた方の話を聞いたからだった。その話のなかで特に心に残ったのが、日本人学校の先生としてマレーシアに渡り、三年にわたって両国の子ども達との間にさまざまな交流の輪を広げられ、その後、そのまま現地に残り活躍されたという女性の話である。彼女によるとたくさんの民族の住む異文化に直接触れてみて、相手を理解し、共存して行くことは難しいが、国は違っても人のあたたかさは同じだと言うことがわかり、又、海外と比較することによって、改めて日本文化の長所短所を考えられるようになったということだった。私には将来、医学の道に進んで恵まれない人々の役に立ちたいという夢がある。その夢に近づく第一歩として隊員として派遣されている人達の生活を少しでも体験してみたい、もっともっとよその世界を知りたい、自分の眼でいろんなものを直接感じとりたい、そういう気持ちが重なったのである。

そして私のこうした思いが通じたのか、幸いにも私は団員の一人としてマレーシアに行くことになった。

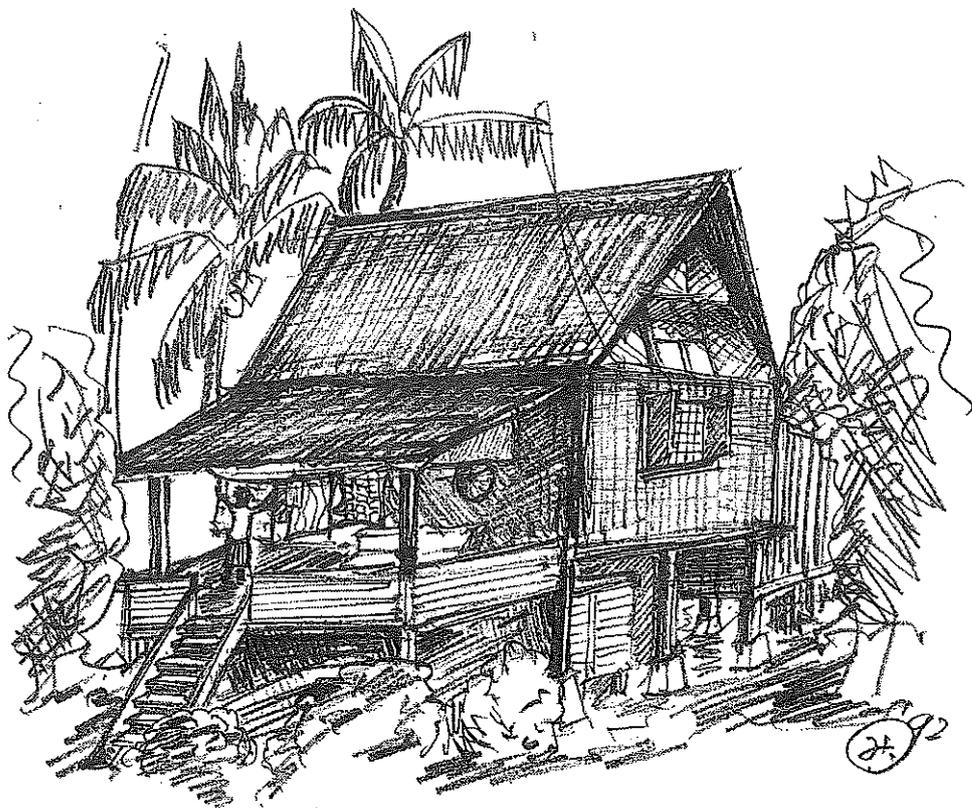
首都クアラルンプールから北に約6時間

ほど車を走らせた所が私達のホームステイ先であるペラ州スブランペラであった。高速道路をおりてから広大なバナナ園や白樺のような背の高いゴム・油やしのプランテーションが、地平線のかなたまで続く。時々、ブーゲンビリアの咲きみだれる原っぱで、のんびりと牛の群れが草を食べている。何だか時の流れが、分刻みの日本とは違ってこちらの方がゆったりしているような気がした。

マレーシアは熱帯であり、雨季と乾期に分かれ高温多湿な所である。そのため特徴として家のつくりは高床式になっており、床下では鶏や鳩が飼われている。夕方、陽が落ち空が刻々と茜色に深さを増していく頃、不思議なひびきをもったコーランがゆっくりと家々に流れ始めた。初めて聞くコーランは、甘いようでいてどこか哀しく懐かしく、遠い昔を思い起こさせるような感じだ。コーランが聞こえ始めると家族はお祈りをする父を抜かして皆、夕食の支度を始めた。一緒に遊んでいた近所の子供達も十人程ぞろぞろとめいめいの家に帰っていった。イスラム教のお祈りは、一日五回ある。朝昼晩、信者達はマットをひろげメッカの方に体を向け祈りを続ける。しかも、毎日欠かさずにだ。

私たちが出かけた時期は、ちょうど三月で断食の一ヶ月間（ラマダン）にかかっていた。5：30から19：30まで14時間。日中、日が照っている間は食物は勿論のこと、水一滴も飲んではいけない。日中マレーシアでは気温が35℃～37℃まで上がる。断食を挑戦した三日目は、朝から猛暑で奉仕プロジェクトのひとつである保育園のプール造りが組まれていた。ホームステイ先の家族は心配していたが、

砂を運んだり、ショベルでこねたり、れんがを積んだり、初めての経験でなかなか体が思う様には動かない。だんだんと、ノルマを果たせるかどうかとあせりがでてくる。しかし太陽は首すじや頭にじりじりと照りつけてくる。汗が滝のように背中を流れ、ずっと立っていると立ちくらみがきそう。途中で辞退したり倒れたりする人が出てきて最後まで断食をやり遂げたのは、10人中6人となってしまった。が、無理もない。



「一度はチャレンジしなきゃ、せっかく来た意味がない。イスラム文化を少しでも知るきっかけとなれば…。」
ということから断食に挑戦する意志を告げた。

プール造りは、一番暑い真っ昼間から始まった。まずはセメント練り。分担作業で

かなり体力を消耗した。宗教の違いがあるとはいえ、あまり人間的なことじゃない気もちよっとした。でもやり遂げた後、ホームステイ先の両親はとても喜び、ご近所の人に満足げに話していた。マレーシアの人々はとても近所仲がいい。家と家の間に垣根などの境も特になく庭続きになっている

ので、互いがしょっちゅう行き来している。おかげで、たえず家のまわりはにぎやかだ。子供達はどこからともなく自然に集まってくる。上は14歳位から下は3歳位まで、日が暮れるまで広い原っぱで草野球をしたり、鬼ごっこをしたりしている。とにかく大人も子供もとても人なつっこい。私が一人していると、あれこれと家の中でも外でもすぐに話しかけてくる。はじめは、何にも意味は分からなかったのに、何となく笑いながら身ぶり手ぶりでやっているうちに通じ合え、理解できた時の喜びは、何ともいえなかった。毎晩毎晩、家族みんなが私のお喋りに楽しそうに加わってくれ、嫌な顔、つかれた顔など決して見せたことはなかった。暮らしは、決して裕福だとはいえないのに、自分達のできる範囲で最高のもてなしをしてくれたのがよく分かった。家で一番上等なベッドに私達をねかせ彼等は床にふとんを並べ、食べ物もいつもより献立の数を増やし、味つけにも母さんはとても気を使い、いつも手の込んだ料理ばかりだった。初めて、家に着きホストファミリーと言葉を交わした時、全くお互いの言う事が理解できずに、途方に暮れてしまったり、日本とは全く違うトイレなどの生活習慣に戸惑ったこともあったが、大切なのはそれに臆することなく異文化や習慣の違いなど違いは違いとして受け入れるだけの心のひろさをもつことだと思った。

私のホームステイ先の両親をはじめ、スブランペラの村人達は、ほとんどが農民と

して農業に従事していて村はそれによって成り立っている。村人をはじめ多くのマレーシアの人は、日本人に対しとても友好的だった。

「日本人は、素晴らしい。よく働く。日本は豊かでいい国だ。」

と、口をそろえて言っていたのは、ひとえに協力隊の人達が日頃、いろんな面で努力されていることへの評価のあらわれだと思った。

スブランペラには、土壌肥料で農業指導をしている柏木隊員と保母の新家隊員の二人の方が活動されていた。二人共、ぱっと見れば、現地の人と間違う程よく日焼けし、Tシャツに作業ズボンのようなラフな格好でさっそうと現れた。マレー語も上手に話されすっかり現地に溶け込みとても生き生きと自分の仕事や生活に誇りをもっているようだった。聞くところによると、この村は青年海外協力隊の事業が成功している一例で、マレーシアの農村のなかでも豊かな地域らしい。将来的にもこのままいけばもうほとんど心配はないし、農業の機械化や灌漑設備も着々と進んでいるということだった。

青年海外協力隊が発足して27年。多くの隊員の方達の努力によってたくさんの国の人々の生活は、大きく向上したことと思う。

「協力隊の真の目的は、ただ単に恵まれない人達に奉仕するのではなく、その人達が彼等の力で工夫して生活をよりよいものに

していくための手助けをすることなんだよ」と、柏木隊員が話して下さった。その話を聞いて私は、協力隊が不必要になる日が一日も早く来ることこそが理想なのではないかと思った。

帰国して数日後、郵便受けを見ると、マレーシアからのエアメールが届いていた。差出人は、マレーシアでも一、二位を争うような進学校の高一の男の子からだった。マレーシアにはこのような国立全寮制男子校が三十六校ある。小学校卒業時に、国が実施する全国统一テストによって選りすぐられた全国の秀才が集まり、中高一貫教育を受けるそうだ。（男子だけというのは、ちょっと気になるが……。）私達が、ここを訪問して驚いたのは、彼らが皆かなり流暢に日本語を話し、席に着くなり用意していた日本語での質問を次々と矢継ぎ早にしてきたことだった。聞いてみるとこれらの進学校では、マハティール首相の打ちだした東方政策（日本に追いつけ追いこせ）をもとに第二外国語として英語の次に、日本語の授業が、組まれているということであった。私達も英語の授業を受けてはいるが、彼らのこの勢いには負けそうである。彼らに日本語の指導をしているのも青年海外協力隊の二人の女性だった。手紙をくれたルスミザン君はじめ彼らの多くは、純粹に日本にあこがれを持ち、日本をモデルにして頑張っている。それを考えると、今の日本の青少年は、何となく毎日を過ごし、ちっぽけな豊かさに甘んじているような気がし

てはずかしい。今や東南アジアの勢いはものすごい。うかうかしていれば日本などあつという間に追いこされるかもしれない。

けれども、このようなアジアの子供達、さらには世界中の人々が、将来手を取りあつて、いい所は認め合い、悪い所はおぎない合えるような社会をつくれれば、きっと豊かで平和な世界になっていくだろう。人間が一人だけでは生きていけないのと同じように、国も一つでは生きていけないと思う。

最後になりましたが、弓場団長をはじめ同行して下さったOBの方々、国際交流協会の皆さん、応援して下さいった中学校の諸先生方、現地のことについていろいろとアドバイスして下さい下さった方々、そしてスブランペラの家族はじめ多くの方々、素晴らしい出会いを本当にありがとうございました。これからもこれをワンステップとして一步一步自分の夢に近づけるよう日々努力していきたいと思ひます。



郷に入っては、 郷に従え

島田 守
(鹿屋農業高等学校 3年)

戦後45年、日本は急速な経済成長を経て、今では世界の富の15%を占めるほどの大国になりました。そのため、日本の国際的地位も高まり、国際化の波が押しよせ、私たちの生活にも浸透してきています。それでは、本当の国際化とは、いったいどういうことを言うのでしょうか、そのことをこの青少年海外協力体験事業によって学びとれたような気がします。

マレーシアは人口約1800万人、面積は日本の約90%、人種はマレー系・中国系・インド系に分かれており、マレー人の宗教はイスラム教です。国の政策に「ルックイースト政策」(東方政策)と(WAWASAN2020)(2020年には先進国の仲間入りを!)があり、日本の企業の進出は歓迎されており、街中のいたる所に日本企業の看板や日本製品が目につきました。

私たちが三日間ホームステイをしたペラ州スブランペラは人口7000人で、そのほとんどがイスラム教を信仰し、私たちが、各家庭にホームステイした時はちょうど、イスラム教で年に一回の一ヵ月間の断食・プアサの時期で私も三日間のうち一日だけ挑戦してみました。5:00に起床して、5:30からプアサが始まるので、それまでの間に朝食を食べなければなりません。

それからあとは、19:30まで水一滴も飲んでではなく、当然食べ物も口にしてはなりません。私はこれを実行して6時間後の12:00には、挑戦したことをものすごく後悔してしまい、何度も挫折しそうになりました。食べ物に関しては口にせずとも苦にならなかったのですが、水に関しては14時間中何度も脱水状態になるほどつらいものでした。日中37℃の気温の中、断食を平気で行い笑顔をたやさなかった彼らの姿を見て、私はまだまだ甘いなと思いました。この経験をするによって私は、食べ物に対する考えが変わりました。今まで食べ物に対して感謝してきたつもりですが、それは表面だけであって心の底から感謝していなかったのだと気づき反省しました。また同時に、世界中には貧困で死んでいく人々がたくさんいます。彼らの食べたくても食べられないつらい気持ちが少しでも分かったような気がします。

ホームステイ中の三日間は「郷に入れば郷に従え」でトイレと食事の習慣は、現地の形式どおりにしました。トイレは家の裏庭にあり、電灯はついておらず紙もありません。紙がないかわりにおけに水がためてあり、それを手おけですくって、お尻に水をかけながら左手でお尻をふくのです。1

回目やる時はすごく抵抗がありました。2回目からはコツが分かりうまくふけるようになりました。そのため、左手は「不浄の手」といわれ食事の時は右手だけしか使えません。右手といってもじかにおはしなど使わずに、ごはんやおかずをつかむので原始的な食事をしているという実感がありました。しかし、日本に帰国してからは、おはしを使うのがおっくうでなりませんでした。

またスランペラでは、農業の大規模経営が行われていて、農業高校に通う私にとってはただただ感動するばかりでした。日本は現在、穀類自給率が30%を割りこみ、ほとんどの食物を輸入にたよっています。農家戸数も減少してきています。しかし、マレーシアの今まで見たことのなかった大規模経営（ゴム・オイルパーム・米）を見て農業に対する新たな興味が湧いたような気がします。

私は、現在の高校には青年海外協力隊員になりたくて進んだわけですが、現地での隊員の活動を見て、「行かずにはいられない」という気持ちになりました。なぜなら、自分たちと比べ、生き生きと活動する姿、いやいやながらでなく自分たちで率先して活動する姿に胸を打たれたからです。スランペラで隊員として活動していた柏木さんと新家さんに私が「青年海外協力隊員になりたい」と伝えると、専門分野外の知識も身につけた方が良いでしょうと教えて下さいました。村人と二年間共に生活していく上で

専門知識だけあっても、他の知識も持っていなければ生活ができないため、このことを聞いて、私も、もっと勉強しなければならぬと思いました。私は、この一週間、本当にすばらしい経験をしました。この経験を自分の内に秘めるのではなく、いろいろな人々に伝えていこうと思います。そして、アジアに一人でも多くの友人を作りたいと思っています。アジアを「近くて遠い国」としていたのは私達自身だったと思います。これからはもっとアジア諸国にも目を向け、近隣諸国の交流を進めていかなければならぬと思いました。また、自分たちの地域でも国際交流ができるような環境を作っていきたいと思いました。最後に、この体験事業を主催して下さいました鹿児島県のOB会・国際交流協会の方々、また支援する会の方々、応援して下さいました。本当にありがとうございました。



私とマレーシア

大川 志野

(南指宿中学校 3年)

私がマレーシアへ行く切っ掛けとなったのは、ある日、何気なく見ていた新聞の記事です。両親と話し合った末この体験事業に応募し、一次試験、二次試験と幸運を呼んで通過しました。信じられないまま、あれやこれやとバタバタ準備して、3月27日には元気に出発することができました。

マレーシアの最高気温は35℃~37℃でとにかく暑く、熱帯雨林気候のせいか、緑が多いのに目が行きました。スベランプラの村では高床式の家が多くて、木で出来ており、私のホームステイ先は、けっこう豊かな生活をしている様でした。家には、テレビもあったりビデオがたくさんそろっているのにはびっくりしました。洗濯機やラジオと言った電気製品もそろっていました。それにしても虫の多いのには困ってしまいました。でも本当に困ったのはトイレでした。電気がないのにびっくりし、お母さんに

「ライト!ライト!」と叫んでみても、

「NOTHING」

とただ笑って答えるだけでした。トイレは、外にあったので、こわかったし、夜だったので辺りは静かで虫の音だけが聞こえていました。どれだけ日本のトイレが恋しかったことか言うに及びません。

ホームステイ二日目にプアサにチャレンジしました。けれども気温の差や、なれない環境でカゼをひいてしまい、やむなくリタイヤしました。

「ここまで来て、あきらめないといけないなんて」悲しくなりましたが、自分に対してくやしい思いや許せない思いでいっぱいでした。その日の夜は近所の子供達と遊んで、花火をしたり、マレーシアの歌、日本の歌を歌ったりしました。近所の仲が良いのは子供だけでなく大人も同じことでした。「隣に住んでいる人の顔も知らない。」という言葉はどこからでてくるのだろうかと思いました。同じ人間どうしなのに、それに初対面の、外国から来た私を友達、いえ友達以上にやさしくしてくれる人々。私は、ここで人間関係について深く教えられました。

何か不満なことがあるとすぐ顔に出る私は、私を見ている友達や家族のことを、考えたことが今までにあったのだろうかと思いました。マレーシアに来て、いろいろな人に出会って何度かいろいろな事を考えました。バスから手をふる私に、笑顔でふり返してくれた人々。たくさんの問題点があったにもかかわらず、勉強不足の私を温かく迎えてくれたホストファミリーと近

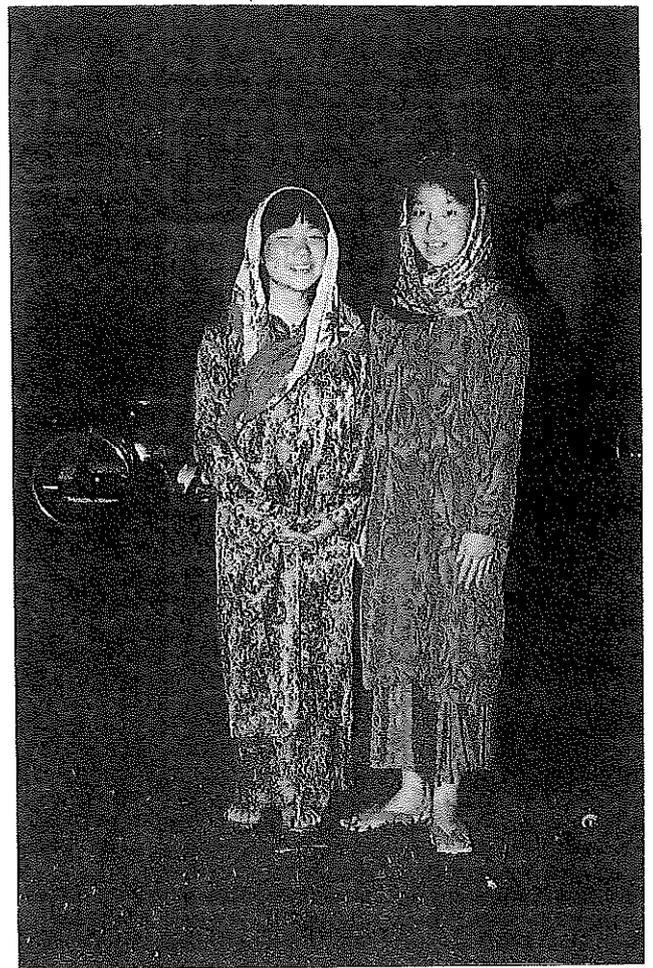
所の人々。何も分からない私に日本のことを英語を使って一生懸命話してくれたスベランプラのスイカを売っていたお兄さん達。彼らは何があってもいやな顔一つしないで、いつも、いつも笑顔をたやさずにいました。私は、そのことが忘れられません。日本のことを、

「変なことで大騒ぎしたり、流されやすかったりしていると批判し、私達はもっと世界に目を向けるべきだ。」

と話していた柏木隊員の言葉が頭をはなれません。情報化時代になった今だからこそみんなが真剣に物事を考えなければいけないんだと思います。でも、マレーシアに来ていなかったら、外見ばかり気にしたり、だらだらと毎日をすごしていたままだったかもしれません。“その日は二度と返ってこない”と言うように、後悔ばかりじゃいけないと思います。その日、その日を大切に生きようと思います。

マレーシアに来て、私はたくさんの事を学びました。その一つは、協力隊員は素晴らしいということです。文化・歴史・生活習慣が違う国へ一人が入って、現地の人々と助け合いながら毎日をすごしている。ただ単に海外に行って働くのではなく、自分の持つ技術を生かし、教えたり教わったりしています。はっきりとではないけれど、“青年海外協力隊”の意味がなんとなくぼんやりと見えてきたような気がします。今の私には無理だけれど、何年後かにはその一人になりたいです。そして、こんなに

素晴らしい事業に参加できたことをうれしく思います。もっと、もっと多くの人々が体験してほしいです。一度外国へ出てみないと分からないことはいっぱいあります。たりなかった“何か”が見つかるかもしれません。またチャンスがあれば、たくさんの方にチャレンジしてみたいと思います。応援して下さい、たくさんの方々に感謝しています。ありがとうございました。



共に学ぶ

山之内 卓也

(甲南高等学校 2年)

今、僕の肩には、重い責任が押し掛かっている。それは、義務感であり、現実感である。多忙なる日本の生活から抜け出し、僕達はマレーシアへ行って来た。この事を行かなかった人々に伝えねばならない。そして、青年海外協力隊のことを知ってもらいたい。こういう一心で、マレーシアで味わい、学んだ、素晴らしい事の数々を、幾つか書いてみようと思う。

〈マレーシアの情勢について〉

3月28日に、JICA(国際協力事業団)の事務所を訪れ、その、草野次長より、マレーシア社会の情勢について、お話を伺った。

現在の、マレーシアの気候は、異常気象が起こっており、気温が平年より高く、夜に雨が降る事はなかったのに、降り始めたり、山火事が頻発している。マレーシアはASEAN(東南アジア諸国連合)の中では、裕福な国で、今度は先進国へ仲間入りを成し遂げようと頑張っている。マハティール首相の唱えた、「LOOK EAST」(東方政策)という、マレーシアの東側の、日本などの先進国を見て勉強しようと言う政策を進めている。今までのマレーシアの主要な輸出源は、すず・天然ゴム・パームオイルであり、現在は、工業化に力を入れ

ている。特に気付いたのは、自動車工業でバスの車窓から外を見てみると、殆どが、「プロトンサガ」というマレーシア国産車であった。この車は、日本の会社とタイアップして生産された初の国産車である。エンジン前方についている、国旗を形どったものが、恰好よかった。

マレーシアはマレー系・中国系・インド系の人口比率が、6:3:1でヒンズー教のインド系は牛が食べられず、イスラムのマレー系はブタが食べられず、中国系は、両方食べる事など、異なった面は、沢山あるのに、各民族が、それぞれ認めあっている。僕達がバスの中から、外の人に手を振っても、笑顔でかえしてくれる根源が、ここにあるのではないか。こういう点では、日本の中にいる少数民族や外国人を異端視しがちな日本人として恥ずかしい。

国内の問題点として、人口が少ない事がある。面積は日本の90%なのに、人口は1,800万人しかなく、労働力が足りない、それによって、技術をもった人材が足りなくなる。人材の育成・基盤の整備・環境の問題が、中心的なものである。

〈日本に対しての反応〉

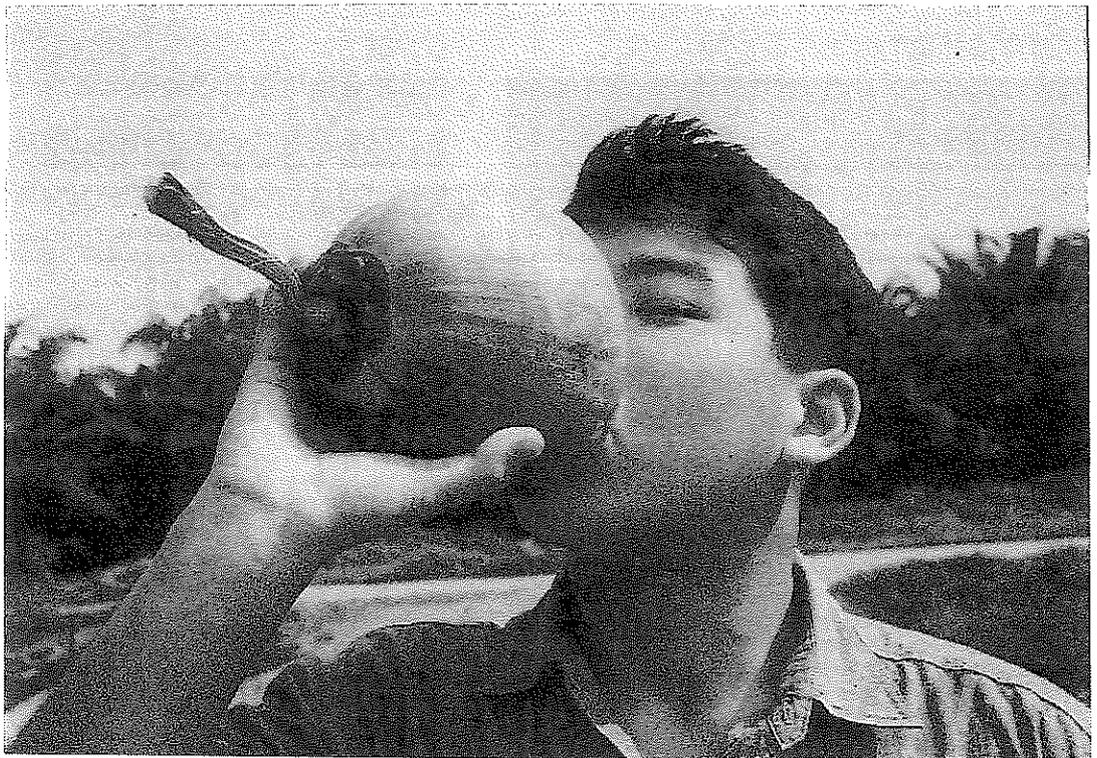
マレーシアには36校の全寮制の国立中等高等学校があり、そのうち六校は第二外国

語として、日本語を学んでいる。青年海外協力隊でも15名ほど、マレーシアに日本語教師を送りこんでいる。ジョイントという形で日本企業が入ってくると、とても歓迎される。しかし、日本企業にしる、他国の企業が、強制的に買収するような形では、反感を買う。住民に自立心をつけさせる事が大事なようだ。

に、日本は、アメリカやEC諸国だけでなく、東南アジアの方にも、もっと目を向ける必要がある。

〈マレーシアで活躍している隊員達〉

やはり、ここが僕が一番書きたかった事ではある。ここでは、草野次長のお話の他に、僕達が、ホームステイ先などで出会った協力隊員についても、紹介する。



あと20年いや、10年たてば、僕達が、日本の職場の、第一線で働く事になる。その時は、日本を目標にして、追いつけ、追い越せで頑張っているマレーシアが先進国の一つとして、君臨している頃かもしれない。その頃もまだ日本は今のような経済的位置を占めていられるだろうか。日本には資源がない。しかしマレーシアでは、原油が採掘できる。農業も発達している。反対

JOCV (青年海外協力隊) の職種も、いろいろあって、僕達と出会ったのは、土壌肥料、日本語教師、養護、保母の職種の人々だった。保健衛生の面では、養護の隊員は幼稚園・公民館・家庭を訪問するが、日本と比べ、施設、技術がおくれている。初めは、ボランティアで活動していたが、隊員が実績をもち、その人々にもいくらかの助成金が国から出るようになった。昔は、

幼児教育（保母）は、資格がいらす、子供を集めて遊ばせればよかったが、今は、学校に入る前の教育が、重要視されるようになってきて、読み書き、計算、しつけなど、日本並の教育熱心である。スブランペラで出会った保母の新家隊員が、マレーシアの人々の育児の仕方は、あまり、良い方法でなく、これからも、日本人による、地道な教授を続けねばならないようだった。しかし、子供が好きな新家さんには、あんな人なつっこい子供達の世話ができ、やりがいのある仕事だろうと思った。僕も、保育園で子供達をあやしていくうちに、心が和んだ。新家さんは、保育園の遊戯の中に、日本の童謡を取り入れたり、日本の絵本を翻訳したりして使っていた。それとは対照的に、男性で、精力的に活動している柏木さんは、

「協力隊に入りたいというやる気さえあれば大丈夫だ。やりたいならやってみればいい。今も1ヘクタール8トンの収穫量という金字塔を建てる目標を持っている。」

と話して下さった。ホームステイ先で出会った隊員二人は共に、マレーシアから、日本の良い面悪い面が見えてきて、人生観が変わったと言っていた。現地で、わがまを言わずにいれば、仲良く人々とやっていける。中身が問題だ。と話して下さった。また、イポーの中高等学校で日本語教師をしていた藪下さんや藤沢さんは、マレーシア有数のエリート校で、活気ある毎日を送っている。僕としては、もし隊員になった

らこの職種になりたい。現地の生徒とコミュニケーションをし、毎日の余暇に、東南アジア諸国の研究ができれば、充実した日々が過ごせると思う。この二人の隊員のように。

〈帰国後、日本をみつめて〉

多種の民族が共存するマレーシア。そこで互いに相手の宗教を大事にしている人々を見てきた。地平線まで見渡せる農園を見てきた。スブランペラの人々の温かい歓迎を受け、日本では絶対に体験できない異文化の生活習慣に触れさせてもらった。帰国後、マレーシアでの事を思い出してみる。ホームステイ先の家を後にするとき、僕が日本へ来てください。と言うと、最後に、家族の一人が、

「日本は金持ちだ。私達は貧乏だから到底行けない。」

と言った事が、強く印象に残っている。全てが、そうではないかもしれないが、日本人は、金があるのをいい事に、相手を見殺した横暴なふるまいをする。日本では普通の金額も、マレーシアでは多額に変わる。マレーシアのレストランで食事をする時、僕はできるだけ残さないよう気をつけた。今、残した料理がマレーシアの人々にとって滅多に食べられないものだったらどうだろう。日本人が東南アジアの人々に対して偏見を持つのは、その経済的地位の差から来ていると思う。また、東南アジア諸国に対して誤った理解をしている事にもあると思う。日本人が、過去に、どのような悪い

事をここの人々にしたか。それを知らずに、いる人々が多い事は、絶対になくすべきだと思った。

僕にとって、今回のマレーシアでの青少年海外協力体験は、価値観が変化し、将来を展望する上で、最高の機会だった。多感な青春時代に、このような体験をさせて頂き、影で支えて下さった人々に、深く感謝する。僕もこれから、未熟な精神、頭脳を鍛え、将来、今回出会った隊員を目標に、

頑張っていこうと思う。目に涙をうかべて言った、

「アイ・ウィル・カム・バック・トゥ・マレーシア。」

の言葉を忘れずに、そのためには、目前にある困難の山を突破していかななくてはならない。これからもずっと、青少年海外協力体験事業を続けていって欲しい。

この体験した素晴らしい事の数々を、精一杯伝えて行こうと思う。ありがとうございました。



協力隊員に接して

江並 美香

(鹿屋高等学校 3年)

“とても生き生きとして、今というこの時を思う存分謳歌しているのではないか”

これが、私がスブランペラに入り、現地で活動されている2名の隊員の方やイポー市の学校でお会いした、2名の日本語教師隊員、また、短い間だったが行動を共にしてくださった鹿児島出身の北田隊員に対して抱いた最初の印象である。私は、このスブランペラで過ごすことのできる間は有意義なものとし、様々な経験をして彼らのように「本当に来てよかった」という言葉を残し、この村をそしてマレイシアを後にしたいという思いにかられていた。

言葉や文化、気候をはじめとし、様々な生活習慣のことなる異国の地で、それらのハンディを背負いながらも単に生活していくだけではなく、現地の生活に溶け込み、コミュニケーションを計りながら、技術の向上に努めるというのは、並大抵の苦勞ではないだろう。しかし、彼らはそれらを私たちに対し、少したりとも感じさせはしなかった。むしろ彼らから感じとれたのは、そうすることへの喜びだったような気がする。あらゆることが競争化し、知らず知らずのうちに自分本位な考え方や行動になりがちな現在、自分の見返りや利益のみを期待するのではなく、まわりの人々が感謝す

る姿や彼らの生活などが改善されていく姿を喜びとし、またそれを自らの喜びとするような彼らの純粋な、奉仕する態度の中に私達が忘れつつあるものを、私達の本来あるべき姿を見つけたような気がした。何気無い日常生活の中にも気を付けてみると、ちょっとした心遣いで改善されていくことは、たくさんあるだろう。目に見えてその効果がわかるような大きなことは、できないだろう。しかし、広い視野と寛大な心を持ち、少しでも回りの人の役にたつことをしていきたいと、そしてそうすることにより自分の人格というものを高めていきたいと思う。

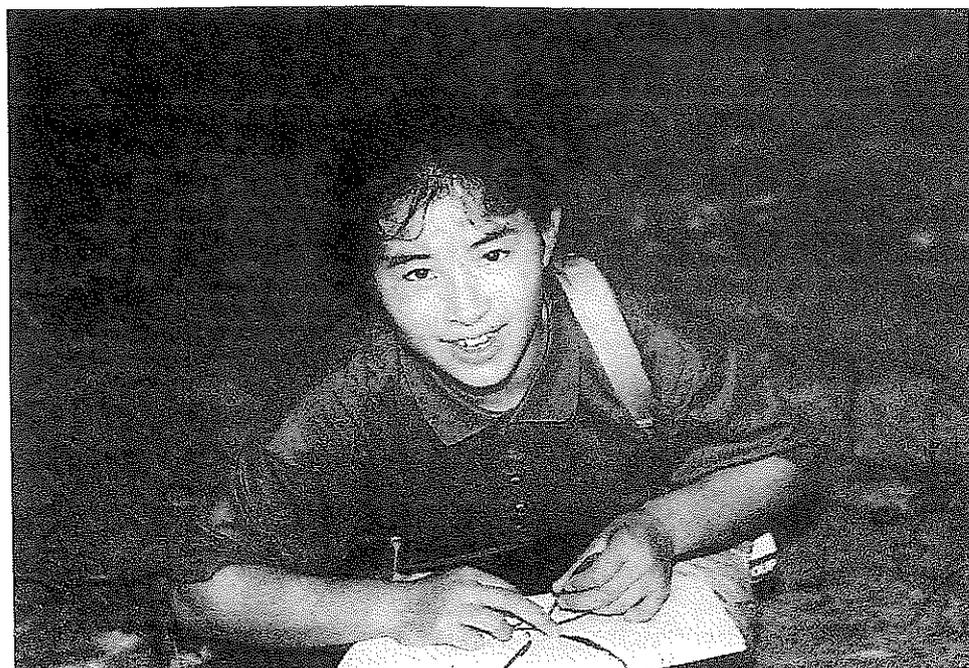
私は、協力隊員は海外でその国や地域における様々な分野の向上をお手伝いしているといえども、毎日が変化に富んでいるというわけではなく、ともすれば仕事も日本のように官僚的に、また画一化しがちのような気がしていた。しかし、彼らには、様々な困難に妥協したり、あるいは現状に満足したりする様子はなかった。“今、自分にできることは何か?” “今、自分がやるべきことは何か?” という疑問を持ち、常に自分自身に問いかけながら向上心を忘れずに、更なる進歩を目指して何事にも絶え間ない努力をなさっていた。また、このこ

とにより彼らは、知らず知らずのうちにその地域（国）における自分の存在の大きさを、また必要性を感じながら充実した日々を送っているのではないか、という気がした。彼らのそのような姿にふれ、自分の姿を振り返ってみたとき、それまでの自分の態度の不甲斐無さを目の当たりにし、反省させられた。これからは、彼らのように向上心を持ち、積極的に取り組んでいきたいと思う。また、そうすることにより自分の姿が少しでも確かなものになれば………と思う。

この7泊8日の体験事業により、マレーシアという異国の地で、イスラム教という私達の日常接することのない宗教と共に暮らす人々と接し、またその文化を学ぶことにより、マレーシアに関する知識を深めることをはじめ、様々なことを感じ、考え、体験し、学びそして得ることができた。

(～百聞は一見にしかず～)

このことわざを今回の経験で痛感した。マレーシアだったからこそ、また今だったからこそ感じることも多かったのではなからうか。また現地で実際活動を行っている協力隊員の方の姿に触れることにより、様々なことを学ばしていただき、自分というものを再確認することができた。その他にも協力隊員のOBの体験談を聞き、お話しをすることにより普段知ることのできない様々な国の文化や習慣また民族の多様性などを教わり（実体験に基づくもののため説得力もあった）国際強力に対する自分なりの考えも持つことができた。それらは私にとってかけがえのないものに、心の糧となるだろう。今回会うことができた5名の協力隊員の方のように自分というものを見失わず、常に努力し、少しでも人に役に立てるような人になりたい。そして、チャンスがあればぜひ協力隊にも参加し、自分の持っているもので人々に貢献し、彼らのような経験をしてみたいと、強く心に思った。



異国への第一歩

西本強志

(鹿児島工業高等専門学校 5年)

「マレーシアの村の中でのホームステイや現地の青年海外協力隊員の活動にふれて、豊かな国際感覚を養う。」ということを主目的とした、鹿児島県青少年海外協力体験事業に今回選ばれた私は、本当に幸運だったと思っている。私には、マレーシアの文化・生活・風習にも関心はあったが、それよりも今回マレーシアに行くに先だって一番の関心事は、協力隊員の活動内容だった。彼らの技術は、外国でも通用しているのか？外国の人々にどのようにして技術移転を行っているのか。たくさんの疑問が頭の中で渦巻いていた。しかし、マレーシアに行き、実際に現地で活躍している協力隊員の姿を目にすることにより、これらの疑問は頭の中から消え、逆に「日本の技術はすばらしい。協力隊員はたのもしい。」と感心させられた。

今回私達が、ホームステイをしたスブランペラという村で二人の協力隊員の活動を目にすることができた。保育所の保母をやっている新家さん、農業関係で土壌改良の指導を行っている柏木さんだ。二人とも、それぞれの専門分野で一生懸命に頑張っていた。言葉も生活習慣も日本とは異なるマレーシアでの協力隊活動は、本当に大変じゃなかりうかと感じた私だが、二人とも目

を輝かせて、「大変なのは、最初のうちだけだよ。慣れてくると、結構楽しいし、やりがいも日本よりマレーシアの方が持てるよ。」と話してくださった。言葉の問題、生活習慣の違いなどたくさんの困難があるに違いないと思ったが、二人の隊員は、日本よりも日差しの強いマレーシアで、まっくろに日焼けして、現地の為にがんばっていた。「これが、協力隊員なのか。これが日本人なのか。」と深く感動した。また、



スブランペラでのホームステイの期間中、柏木さんが働いているという、農場に見学に行った。広大な敷地に見渡すかぎりの畑、カカオ園、オイルパームのプランテーションが広がり、日本とは全然比べものになら

なかった。「スケールが全然違う」と思った。柏木さんは、「この広い農場を私を含めて4~5人で管理しています。」と話してくれた。「この様に広大だと、日本よりもやりがいもあるしやる気も出てくるよ。」と誇らしげに柏木さんは、話をしてくれた。新家さんの働いている保育所も訪問した。彼女は現地の子供達に日本の歌や踊りなどを教えていたが、私達が訪れた時には、現地の子供達による、「むすんで、ひらいて」の歌を聞かせてもらった。「子供達は、日本でもマレーシアでも、かわいいものよ。」と彼女は笑顔で話してくれた。

今回、柏木さんと新家さんの二人の協力

活動を目に出来た事は私にとって大きなはげみになった。「日本以外でもがんばっている人がある。文化や言葉が違ってても立派にやっけていける。」その他、いろいろな事を二人の協力隊員を目にして得ることができた。「自分の持っている技術を、誰かの為にある国の為に發揮する。自分の技術を必要としている人達がいる。その人達の為に自分の出来る事をやっけてあげる。これが、私の求めているものだ、と二人の協力隊員を目にして実感させられた。私も将来、「彼らの為にやっけています。」と、胸を張って言えるような、協力隊員になりたいと思った。



私の好きな スブランペラ

三浦 糸代

(鹿児島玉龍高等学校 3年)

私は、以前、「からいも交流」で有名な加藤憲一さんの講演を聞いたことがあります。話の中で加藤さんは、だれ1人頼る人もいない見知らぬ土地で、ゼロの観点にたって自分を見つめ直すことの大切さを話してくれました。ゼロの観点に立つと、自分の内に秘められた能力や、今まで気付かなかった自分自身や日本についてまでも様々な新しい発見ができるというのです。私はこの話を聞いて、私もぜひ、異国の地でいろいろな人と接し、いろいろな体験をすることによって自分をゼロにして、自分をもう一度見つめ直し、これからの成長の一過程にしようと思い、この体験事業に挑みました。

7泊8日の中で私に様々なことを教えてくれたのは、私達がホームステイした村スブランペラです。ホストファミリーをはじめ、スブランペラの人々の笑顔は今でも私の心の中にはっきりと残っています。マレー語のわからない私に、一生懸命身ぶり手ぶりで伝えてくれて、何回聞き直しても全く嫌な顔一つせず話してくれた村の人々。私達は、時間に追われた生活を送っているからか、2、3回言っても相手が理解できなかったら、「もういいよ。」と済ましてしまいがちです。しかし、この村の人達は、

笑顔を絶やさず気長に話してくれました。この心のおおらかさに、私は今までの自分を反省させられました。

また、保母さんとして赴任している、青年海外協力隊員の新家さんやスブランペラの保育園の子供たちと3時間ほど交流する機会がありました。私達が訪問した時は、ちょうどお誕生会で、一緒に祝うことができました。初めは私達を怖がって、隠れたり泣いたりしていた子供たちも、一緒に歌を歌ったり、踊ったりしていくうちに心を開いてくれました。私達の心が通じたのでしょうか。私もずっと我を忘れて子供達と走り回っていました。自由に遊び回る子供の目は、黒く澄んでいて純粹そのものでした。また、新家さんは、日本の歌や遊技など、日本の文化を取り入れて指導していました。そして、子供達も歌ったり踊ったりしていました。子供と接する彼女の姿は、表情が生き生きとしていて本当に1日1日がとても充実しているようでした。私は、輝いているそんな彼女を大変うらやましく思いました。それと同時に、私も彼女のような表情を持ちたいという思いがどこことなく湧いてきました。そして、少しでも社会に貢献したいと思うようになりました。

子供達が帰る時に、私に一番なついでく

れた男の子が私の手にキスをしてくれました。驚きました。日本ではこんなことはなかったからです。でも、すごく嬉しいでした。たった3時間という短い時間の中で、言葉も通じないのにこの子には私の心が通じたのです。本当に嬉しくて私も彼の手にキスをしました。私はまたスブランペラの人々に近づいたような気がしました。そして、このことは、私に1つの大きな目標を与えてくれました。それは、私が絶対保母さんになって、青年海外協力隊の一員としていろいろな国の子供達に教えるということです。それから、協力隊の任期2年間の自由な空間のもとで自分の技術を見直して、他の子供達とも接してみたいです。世界には、同じ人間なのに、膚の色、顔の表情、価値観など私と違う人がたくさんいます。しかし、話しをして接してみるとみんな心は1つだと思いました。私は、この体験により、世界中みんな同じ人間として信頼しあうことができることを学びました。

私は、スブランペラが私にとっては、ゼロの観点に立って、自分自身を見つめる出発点になったと思います。前に述べた加藤さんのように、スブランペラでの体験によって、様々な新しい発見をすることもでき、自分を見つめ直すこともできました。スブランペラの人々は、私達日本人が忘れてしまっている笑顔や心、自由を持っています。村の人々の心の豊かさや子供達のおおらかさ。私達日本人は、子供達は勉強、大人は労働と、窮屈な生活を送っていて、人間本来の真の豊かさを失いつつあるのではないかと感じました。しかし、スブランペラの人々を見ていると私も笑顔と心を大切にしながら、世界中の人と接してみたいという気持ちが高まってきました。そして、私も将来、青年海外協力隊の一員の保母として、いろいろな国の子供達や、その国の人々と五感を通じて交流し、異文化を学ぶことができれば最高だろうと思います。



Date 24.4.1992.

Kepada,

Kinuyo, Selamat petang, Sudah makan?

Kinuyo, Surat Kinuyo/gambar sudah diterima dan paham. Bapa, Ibu ucapkan terima kasih.

Kinuyo, Bapa Ibu masa ini baik,

Bapa, Ibu, melihat gambar Kinuyo

sangat cantik, gambar Kinuyo

di-simpan dengan baik.

Bapa, Ibu, harap Kinuyo datang

seberang Perak.

Curry Jepun sudah makan.

Rasanya sedap. Terima kasih

dan jumpa lagi.

Terima kasih.

Hamid Jaffri

絹代こんにちは。お元気ですか？

絹代の手紙と写真を受け取りました。父母もありがとうございますと言っておりました。

絹代、父母も元気です。父母も絹代の写真を見ました。非常にきれいですね。

絹代の写真を大事にとっておきます。

父母も絹代がスブランペラに来てほしいと望んでいます。

日本のカレー食べました。おいしかったです。ありがとうございます。さようなら。

(三浦絹代さんのホームステイ先の家族からの手紙)

僕の挑戦

大沢 昇吾

(山野中学校 2年)

「日が登ってから、日が沈むまで何も食べられない。」と、初めて聞いた時、はっきりいってあまり抵抗はなかった。ちょっと昼食をとらない程度ぐらいにしか思わなかった。今回マレーシアに行って一番印象に残ったこの「日が登ってから、日が沈むまで何も食べられない。」と言うこと。すなわち断食について書こうと思う。

マレーシアに着いて4日目の4月30日。ペラ州スブランペラへ来て2日目のことだった。前の日に決めていたようにこの日は、断食をすることにしていた。朝の起床は5:00。そしてすぐに朝食を軽くとった。途中で、腹がすいてはいけないと、ご飯のおかわりもした。水も、たくさん飲んだ。これぐらいしておけば、大丈夫だと思った。朝食を食べ終わったのは、5:30。いよいよ断食が始まった。まだ集合時間の8:00まで時間があつたので、少し休んだ。2時間あまり寝て目が覚めた時は、まだ口の中に朝食の味が残っているくらい、腹は満腹だった。8時に集合場所に着くと、飲物が用意してあつた。少しのどが乾いていたがまだまだ大丈夫だった。その後2時間あまり話を聞いていた。この断食を、断食挑戦フルマラソンとすれば、まだ、5km地点ぐらいだろう。まだ余裕たっぷりの快調

なペースだった。しかし、この後、この断食挑戦フルマラソンの最大の難所である、プール造りがまちかまえていた。歩いて保育園まで行き、さっそくプール造りが始まった。もう穴は掘ってあつたので、体力を消費しなくてすむなと思ったのが大きなまちがいがあつた。プールを造る時に使うセメント練りがとにかく疲れる。砂と石を運んできて、セメントとまぜ合わせるのである。何も知らなかつた僕は、あんまりはりきると疲れるよという声も聞かず、必死になって働いた。しかし案の定、疲れだした。マラソンでいうと、難所をあまく見て、スピードを上げすぎ、10km走って疲れはててしまったようなものだ。そしてのどが乾き始めた。つばを何回も飲むのだが、のどの乾きは、少しもおさまらなかつた。そうしていると、休憩の時間がきた。休めばのどの乾きも忘れるだろうと思い、2時間あまりぐっすり寝た。マラソンでいうと、やっと折り返し地点まできたのだが、それまで吸水できず、少し立ち止まって休憩しているようなものだ。仕事を始めるぞと、起こされた。もう大丈夫だろうと起き上がろうとすると、なんだか体が重い。立とうとしても、足がふらふらしていた。少しも体力は回復していないし、のどの乾きも、より

いっそうひどくなっていた。それでもプール造りは続けた。もう歩くだけでも息がきれ、目の前がぼやけてきた。何回も、もうやめようと思ったが、せっかくここまできたのに、やめるのはもったいないと思えた。時計を見ると16:00ごろだった。空を見ると、太陽が少し西の方へ、かたむいていた。日の入りの予定が19:30と言っていたので、後3時間ばかりだ。今の僕にとっては、とてつもなく長い時に思えた。もう立っている元気もなかった。ゆっくり時間が過ぎ、やっと17:00になった。プール造りも終わり歩いて家に帰ることになった。それほど遠くないのだが、帰り着くまで1時間もかかってしまった。家に帰り着いた時は、のどは乾ききり、体はへとへとの状態だった。気をまぎらわすために、水浴びすることにした。すぐそこに水があるのに飲めないというのは、本当につらかった。のどの乾きが、いっそうきつくなった。水浴びを終え、外に出て夕日を見ていた。真っ赤なきれいな夕日だったが、早く地平線に沈んでほしかった。一分一秒がこれほど長く思えたことはなかった。太陽が地平線にかかり半分ぐらい見えなくなった。断食挑戦フルマラソンもいよいよ、競技場にもどり、ラスト1周になった。太陽の光がうすれていき、とうとう沈んだ。断食挑戦フルマラソン完走である。ついにやると実感すると同時に、さっそく夕食を食べた。最初の一口のジュースがのどを通り、体中にしみわたった。どれだけこの時を待

ただらう。本当にきつい14時間だった。
「日が登ってから、日が沈むまで何も食べられない。」というこの断食を、実際に経験して、初めてそのきつさがわかった。その他にも、食べ物を食べられる喜び、困難にたえる根性、マレー人の文化など、得た物は、多かったと思う。この体験事業で、断食を経験したことは、きっとなんらかの形で、自分にプラスになると確信している。本当にこの断食を経験してよかったと思った。



17歳の決心

三島 貴恵

(鹿児島中央高等学校 3年)

小学校の、卒業文集の中の「将来の夢」という欄に、私は「青年海外協力隊員になって、開発途上国の人々の為に、少しでも協力したい」と書いた。それ以来、今もなお青年海外協力隊員になりたいという希望は、私の心に強く残っている。また、現在大学入試に向けて一番重要な一年に直面している時だからこそ、もっと真剣に自分の将来をみつめ直す時期だと思っている。

私は、日本語教師になりたいと思っているのだが、本当に自分でやりたい事であるのか、それとも他に何か、私に適した職業があるのではないか、海外で日本語を上手に伝授していけるのか、考えれば考えるほど、不安はつのるばかりであった。そんな時、マレーシアで青少年が、海外協力を体験できるという事業を知った。私は、迷うことなく応募したのであった。

第1回目の昨年、残念ながら選にもれってしまったが、万全を期して臨んだ今年、2回目の挑戦で何とか選抜していただき、今回マレーシアへ7泊8日の日程で、行くことができた。今回の私の研修目的は2つあって、「実際の隊員の方の仕事を見て、自分の将来を真剣に考える」というものと、「複合民族国家マレーシアをよく見て、1人でも多くの友達を作る」ということで

あった。

マレーシアにおける日本語教育は、マハティール首相の掲げる「ルックイースト政策」によって、盛んである。今回の訪問先の1つである、イポー市の「スター」という進学校を訪れた時に、それを強く感じた。

マレーシアでは、義務教育である小学校を卒業する時に、全国统一テストが実施され、その成績上位者をマレーシア全土に36校ある、国立の進学校へと振り分けるそうだ。この「スター」はその中でも上位校らしい。「スター」は5年生の男子校で、私たちは日本語を第2外国語として、学習している4年生(16歳)と、日本語で懇談した。彼らは、流暢な日本語で次々と私に質問してきた。私は日本語で答えながら、頭の中では何だか複雑な気分になっていた。彼らは、私たち日本人よりも少ない時間しか日本語を学習していない。しかし、私は5年も英語を習っているのに、まともな会話もできないという悲しさと、外国の地で、日本語で現地の人と会話しているという変な気持ちが交錯していたのだ。

「スター」には2人の日本人女性が日本語教師として派遣されている。彼女たちに「私も日本語教師になりたいです。」と言ったのだが彼女たちの生徒と話せば言葉な

しでも2人の多大な功績は十分に分かった。その時に、私もこの2人のようになりたい、生徒達に日本語を教えてみたいと強く思った。

「スター」の生徒から、日本についてもっと教えて欲しいので文通したいと言われ、住所交換をした。文通を通じて、彼らにいろいろ教えてもらいたいと、今から楽しみにしている。

味のわからない職種であったが、2人に実際お会いし、また一緒に作業したということで、急に親近感がわいた。2人とも陽気で自分の意見をしっかりと持っておられる方だった。私の目には、2人はもうすっかり現地に溶け込んでいるかのように見えた。そして、それぞれの職場でいきいきと働いている2人を見て、職種こそ違いますが、深い感銘を受けた。それは、彼らの持っている



JOCV（青年海外協力隊）の隊員が、いかにその村で信頼されているかを見せられたのは、3泊4日のホームステイを体験させてもらった、スランペラでのことだった。

この村では2人の隊員が、活動している。土壌肥料の研究をしている柏木さんと保母の新家さんだ。私自身にとっては、余り興

のは、小さな力だけれど現地の人々と協力しあって、一緒に働くことによって、村の人達に役だっているという喜びを2人の隊員の話しから感じとることができたからだった。私も絶対に隊員になりたいと強く心に思った3泊4日であった。今日も、あの赤茶けた色の土の上で、一生懸命に働いている2人の姿がまぶたの裏に焼き付いてい

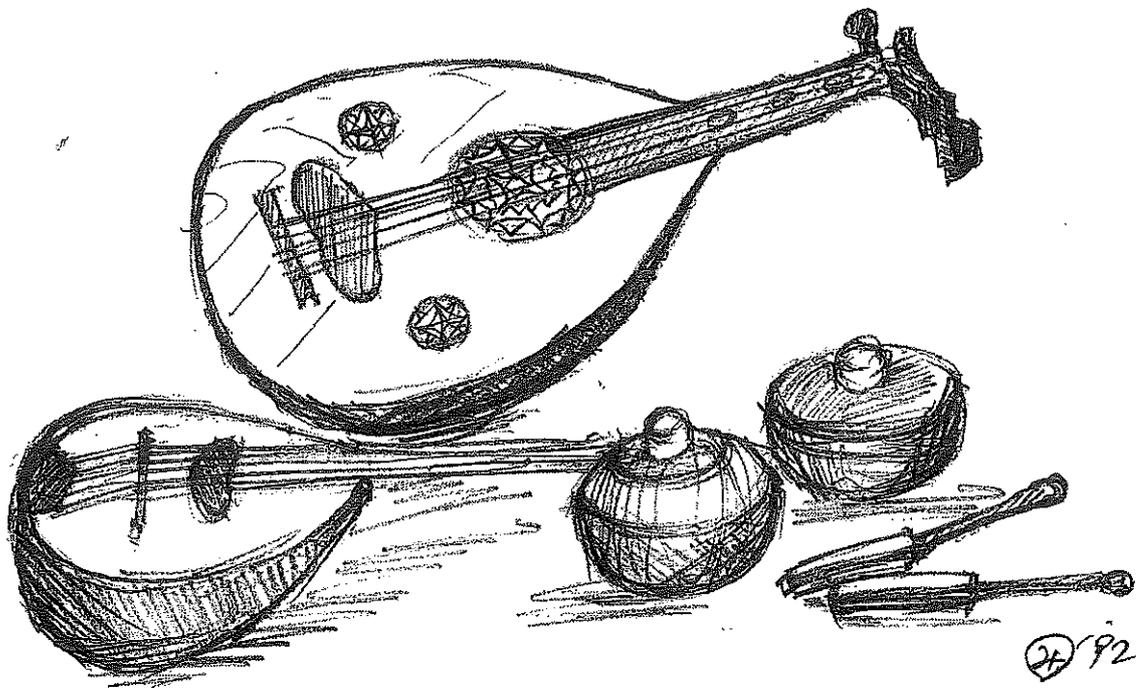
る。本当にマレーシアに行けてよかった。

JOCVに参加できる日が、いつの日になるのか、今の私にはまだはっきりとわからないが、きっとその日は近いうちにやってくるだろうと確信している。今回の体験事業に参加でき、マレーシアに行けたということによって、私の将来への不安は、どこか遠くへ飛んでいってしまったような気がする。そして、今目標は定まったのだから、今後は、まず第一に大学へ進学するために、努力するのみである。いつもこの目標を頭において、励みたい。本当にこの事業に参加できてよかったと思っている。

9人の団員達、引率の方々、JOCVの隊員の方々、JICAの職員の方々、また鹿児島県の支援をしてくださった方々、そして家族に心から感謝している。貴重で素敵な体験や、一生忘れることのできない思い出を抱えきれないほど手にすることができた。

最後に、私は再び大好きな国マレーシアへ近いうちに帰る決心と、JOCVの隊員になるという決心を固めた。ありがとうマレーシア。マレーシアで出会ったすべての人に、声を大にしていたい。

Terima kasih, banyak banyak.



Date, 24-4-1992.

PAPA,

ANAK TARAE MISIMA, Selamat Petang,
BAPA/ibu, adik Baik, Harap anak Pun Sama.

Surat anak sudah terima dan Gambar.
Terima Kasih.

Bapa, ibu, adik masih ingat lagi
kepada anak, makan sama, Tarae
suka minum kopi, kopi MALAYSIA Sedap.

"Bapa, ibu melihat gambar Tarae
Bapa, ibu, menangis ingat kan Tarae.

Tarae orang nya baik, Pandai jaga
Hati Bapa, ibu.

Bapa, ibu, Harap Tarae datang malaysia
datang lah ka-ruma Bapa, ibu..

Bapa, ibu, suka makan Ruti Japanis.

Serian surat kali, Bapa, ibu
akan jumpa TARAE Lagi.

Terima kasih, Terima kasih.

Selamat jumpa lagi! 

我が娘三島貴恵こんにちわ。

私達家族は元気です。あなたも同じ様に元気でしょう。

あなたよりの手紙と写真を受け取りました。

ありがとう。

私達はあなたの事を覚えています。食事を一緒にし貴恵はコーヒーが好きでした。マレーシアのコーヒーはおいしいと。

父母は貴恵の写真を見て泣きました。貴恵は良い人で父母の気持ちを良くくんでくれました。

父母は貴恵が再びマレーシアに来て私達の家に来てほしいと望んでいます。

父母は日本のカレーが好きです。

再び貴恵に会えますように。ありがとう。ありがとう。

(三島貴恵さんのホームステイ先の家族からの手紙)

あ と が き

青年海外協力隊鹿児島県OB会

事務局長 橋 口 和 典

マレーシアから帰国した時には満開だった桜の花びらも散り、目にしみる様な青葉に風わたる5月、私にとって2度目の体験報告書の編集を終えたところです。

昨年に引き続きマレーシアを訪れた私達の今回のホームステイ地は、ペラ州スブランペラ。そこにはオイルパーム、ココナツツやカカオの熱帯林が生い茂り、見渡す限りの広大な農地に団員達は感嘆の声を上げていました。

時は折しも、ラマダンの期間。ムスリムは夜明けから日没までの間、一切の飲食物を口にしないプアサの生活を送っていました。

団員達は、日中37℃の猛暑の中、現地の保育園に「子供達の役に立つものを造りたい」とプアサに挑戦しながらプール建設を行い、慣れない手つきで、手に豆をつくりながらもプールを完成させました。暑さと空腹、喉の渇きに堪えながらの14時間でした。プアサを体験しながらのプール建設は、彼らに素晴らしい充実感と満足感をもたらしただろうと思います。また、イポー市にある国立中等学校スターを親善訪問した団員達は、同校生の日本語力に驚き、日本語教師の活動の成果を身をもって理解し、協力隊員の姿に自分自身の将来像を重ねて見ていた団員もいました。

協力隊員を羨望の眼差しで見ている私には、彼らの生き生きとした姿がとても輝いて見え、団員の目には頼もしい存在として映ったことでしょう。近い将来、団員の中から隊員として任地へ赴く日がやって来ることを心待ちにしています。

私達は読者がこの体験報告書の中から、団員達が体験したプアサや村人との生活の様子を、村の発展や村人の生活向上に取り組んだり、一方で日本語教育に情熱をかたむけている青年海外協力隊員を、また熱帯の厳しい環境のもとでは、その気候や風土に根ざした生活や価値感、宗教が日本とどう違うのかと一言を汲みとっていただけたらと願うものであります。

今回の事業の実施に当って数々の御支援を賜りました国際協力事業団青年海外協力隊事務局、国際協力事業団九州支部、鹿児島県、国際協力事業団マレーシア事務所、連邦土地統合整備公団、スブランペラ現地隊員、スターのムハマッド・シャフィ校長先生及び日本語教師隊員ほか御協力をいただきました皆様に厚く感謝の意を申し上げます。